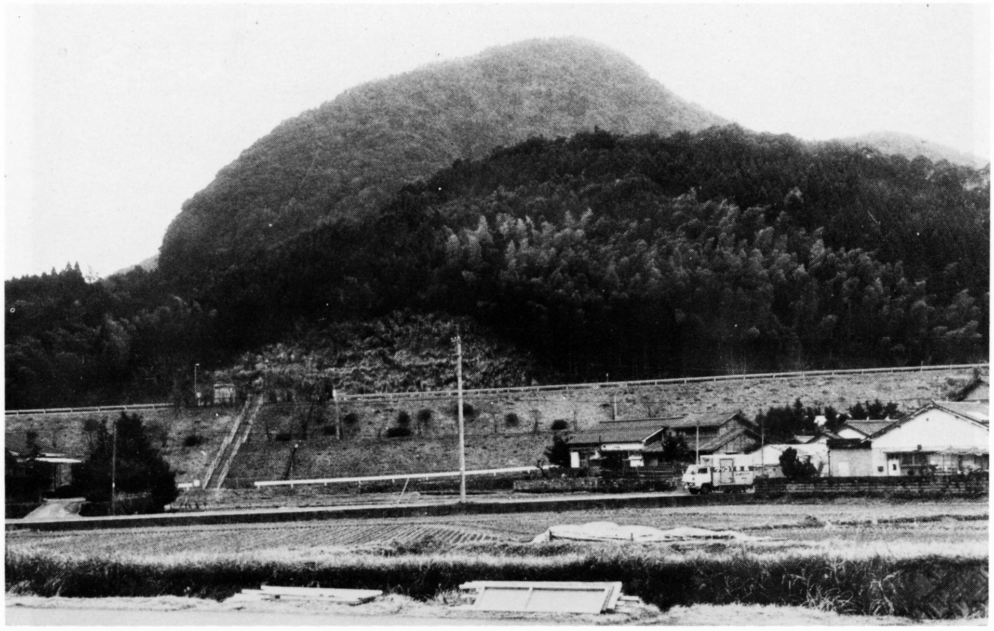
32. 谷 ノ 口 遺 跡

谷ノ口遺跡は，鹿児島県鹿児島郡吉田町本城谷ノ口に位置している。遺跡は，吉田町のほぼ中央部に位置し，本名川により形成された河岸段丘上の畑地に位置している。遺跡の北部から西部・南部にかけては，本名川が蛇行しながら流れ，その両岸に立地する水田地帯とともに遺跡を取り巻くような地形を呈している。北西部約500ｍの所には本城小学校，吉田町役場が所在し，その役場の南側沿いを本名川が流れ，その周辺は水田地帯となっている。東部は標高20.9ｍの山が遺跡地までせまっている。遺跡地の周辺には民家が点在し，民家に隣接した標高約138.6ｍの畑地が本遺跡である。

土層はⅣ層まで確認される。Ⅰ層は褐色土層，Ⅱ層は黄褐色土層で，その大半は削平され，また，攪乱をうけている個所が随所に認められる。Ⅲ層は黒褐色粘質土層，Ⅳ層は黄褐色パミス層である。

遺構は，Ⅲ層黒褐色粘質土層上面に柱穴と思われる掘り方が14個所検出されている。柱穴の規模は長径32cm～70cm，短径20cm～42cm，深さ20cm～58cmの範囲内のものである。柱穴の埋土は，Ⅱ層黄褐色土で，Ⅳ層やⅤ層まで掘り込んでいる柱穴も認められた。柱穴の時期は，遺物包含層と思われるⅡ層黄褐色土層が攪乱を受けているため時期を明らかにすることは出来なかった。

遺物は，Ⅱ層より現代陶器，縄文式土器，成川式系土器，土師器，白磁，滑石製石鍋などの遺物が混在して出土した。



谷 ノ 口 遺 跡

33. 上　城　城　跡

上城は，鹿児島郡吉田町大字本城，町役場の南約500ｍに所在する。

城址遺構は，南より北に突き出た半島状台地に占地している。

当城で最も明確に築城遺構を遺しているものに，馬乗り馬場と称する腰曲輪。1.5ｍ～6ｍの段差をもって階段状に削平した平坦部などである。

また，台地基部はビワンコン瀬戸と呼称される深さ約12m，底幅5.5ｍの瀬戸道は空堀の可能性も強い。しかし，現地踏査のみであるために，全体の形状は不明である。

採集された遺物は，越州窯系，竜泉窯系の青磁片と，すり鉢等の雑器類である。

なお，当城は吉田氏一族中納氏のものであると考えられている中世山城である。

九州縦貫自動車道建設に伴い，現地踏査が行われたが，路線は遺跡の先端部をよぎるのみであったため，発掘調査は実施しなかった。このため遺跡のほとんどは現在する。

上　城　城　跡

34．宮　後　遺　跡

宮後遺跡は，鹿児島県鹿児島郡吉田町宮之浦宮後に位置している。遺跡は，吉田町の南部地区に位置し，飯山・大原・石下谷からのびるシラス台地縁辺部（舌状台地）の切れる先端部付近で，楕木川により形成された河川段丘上の畑地に位置している。遺跡地の西部は八幡神社の敷地に相接し，台地縁辺部を県道鹿児島・蒲生線が通っている。北部及び東部は，楕木川や牟礼谷川によって形成された河岸段丘上は水田地帯となり，さらに，東部は馬場園の集落地となっている。南部は，町道牟礼谷・宮之浦線がとおり，楕木川によって形成された河岸段丘上は水田地帯となり，楕木川が鹿児島市との行政区画区域となっている。

土層はⅤ層まで確認された。Ⅰ層はａ・ｂとに分けられ，ａが褐色土層，ｂは灰褐色土層でａは現耕作面と考えられ，ｂは開墾前のものと思われる。Ⅱ層は赤褐色粘土層で酸化鉄を多く含み田んぼの基盤層と思われ，以前は水田として使用されたものと考えられる。Ⅲ層は黒色土層で，第Ⅲ地点の一部だけに認められる。Ⅳ層は黄褐色パミス層で，Ⅴ層は黒褐色土層である。

本遺跡においては，遺物包含層は確認されず，攪乱部分より縄文式土器・土師器・現代陶器が混在して認められ，第Ⅱ地点のⅢから硬玉製丸玉が出土した。縄文式土器は黒色研磨土器で，硬玉製丸玉も縄文晩期に属するものと思われる。土師器は皿と埦の二種類が出土し，糸切底は平安以降のものと思われる。

宮　後　遺　跡

35．木の迫遺跡

木の迫遺跡は，鹿児島市川上町花棚字木の迫にあり，鹿児島市街地の北方約77 kmの所に位置している。

遺跡の基盤は鹿児島県本土をほぼおおっているシラス台地である。本遺跡のシラス台地は川上町および吉野町を中心とした標高200～260mの東から西へ傾斜したところである。遺跡は精木川の侵食によって150～160m級の台地に形成されたシラス台地の西端にあり標高162mの河岸段丘の畑地に立地している。

層位は，地表面から約20～30cmに表層の耕作土があり，基盤層であるシラスが耕作土直下にみられる。遺跡の東側には攪乱層がみられ，礫混じりの黒色土や礫混じりのシラス層が観察される。

遺物は原位置を示す出土はなかたったが，耕作土と攪乱層（礫混じり黒色土・シラス）から縄文式土器・土師器・須恵器・青磁・染付などが礫と混じりあいながら出土した。また，表層より磨製石斧が出土した。縄文土器は貝殻条痕文を施こした土器で，土師器・須恵器等全て破片であった。これらは遺跡地に遺物の包含層があったが，畑地等により包含層が削平されたものと思われる。

36．加 治 屋 園 遺 跡

1．位　置

加治屋園遺跡は鹿児島市川上町加治屋園に所在し，川上小学校より約700ｍ北に位置している。

2．環　境

遺跡のある川上町は鹿児島市の市街地より約6kmにあり，近くには緑ヶ丘団地が対面にみえる。遺跡の基盤は南九州特有のシラス台地であり，遺跡はこの台地の舌状部に立地している。この台地は川上町，吉野町を中心とする広大な台地で標高200ｍ～260ｍの高さである。このシラスは，錦江湾奥部の姶良カルデラ形成時に噴出した火山灰で入戸火砕流と呼ばれている。加治屋園遺跡は入戸火砕流が形成されたあと，楠木川の浸蝕により150ｍ級の舌状台地に形成されたとみられる。下部には砂礫層を中心とした水成層があり，そのことを立証させる資料となっている。なお，入戸火砕流は今から約20,000～22,000年前といわれている。

3．遺構・遺物

土層はⅠ層からⅫ層までみられ，Ⅰ層は表層，Ⅱ層は黒褐色層で腐植土層である。Ⅲ層はボッコ層でａ・ｂ・ｃ，Ⅳ層は軽石層でａ・ｂ，Ⅴ層は青灰色層でａ・ｂ，Ⅵ層は黒褐色層でａ・ｂ，Ⅶ層は軽石層でａ～ｄ，Ⅷ層は茶褐色層でａ～ｇ，Ⅸ層は軽石層と砂層の互層でａ～ｇ，Ⅹ層は白粘土とシラス質土の互層でａ～ｅにそれぞれ細分され，Ⅺ層は砂礫層，Ⅻ層はシラス層となっている。Ⅳ層がアカホヤ火山灰層であるが一次的な火山灰は良く残っていなかった。Ⅶ層が桜島噴出物の火山灰で最近薩摩火山灰と町田洋氏により命名され，今から約10,000年前の火山灰・軽石層である。

包含層はⅢａ層・Ⅲｃ層・Ⅴａ層・Ⅷｂ層であり，Ⅲａ層は縄文後期・中期の遺物を含み，Ⅲｃ層は縄文前期，Ⅴａ層は縄文前期の遺物を含んでいる。また，Ⅷｂ層は先土器時代の遺物が多量に出土した。なお，Ⅲａ層には古墳時代の遺物も若干含まれた。

Ⅲａ層は西平式土器・指宿式土器・岩崎式土器・並木式土器が出土し，Ⅲｃ層には轟式が出土した。Ⅴａ層には塞ノ神Ｂ式土器が主に出土し，円筒土器と口縁部が「く」の字状に外反する器形がみられた。

遺構はⅢｃ層に集石遺構２基，Ⅴａ層に７基検出された。この集石は10cm前後の円礫を径１ｍ前後に集めて，若干木炭や煤等がみられる遺構である。Ⅲｃ層の^{14}Ｃ年代は5020±105ＹＢＰでⅤａ層の^{14}Ｃ年代は7550± 130YBPの年代がみられる。

Ⅷｂ層は主に黒曜石と頁岩（凝灰岩質頁岩を含む）の２つの種類の石材を利用した石器が多数出土した。黒曜石は細石刃核，細石刃，ブランク，使用痕のある剝片，掻器，削器，彫刻刀，ドリル状石器，剝片等が出土した。凝灰岩質頁岩は鹿児島市の北側の鹿児島郡吉田町から薩摩郡入来町にいたるまで分布する永野層といわれる堆積岩である。火山灰等が沈澱してできたといわれている。この石は盤状に剝げる性質をもっているため扁平な石になる。加治屋園で発見

された細石刃・細石刃核はこの石材を利用している。先づ扁平な石を分割して，3～6cm位の適当な大きさのブランクをつくり，分割面を打面として細石刃を剝離していく簡単な技法をつかっている。この細石刃核やブランクは接合される資料が多い。また，砂岩や頁岩も同様にして細石刃剝離を行なっている細石刃核もみられる。

また，この層には粘土紐を口縁部に貼り付けた隆線文土器と無文土器片が114点出土した。

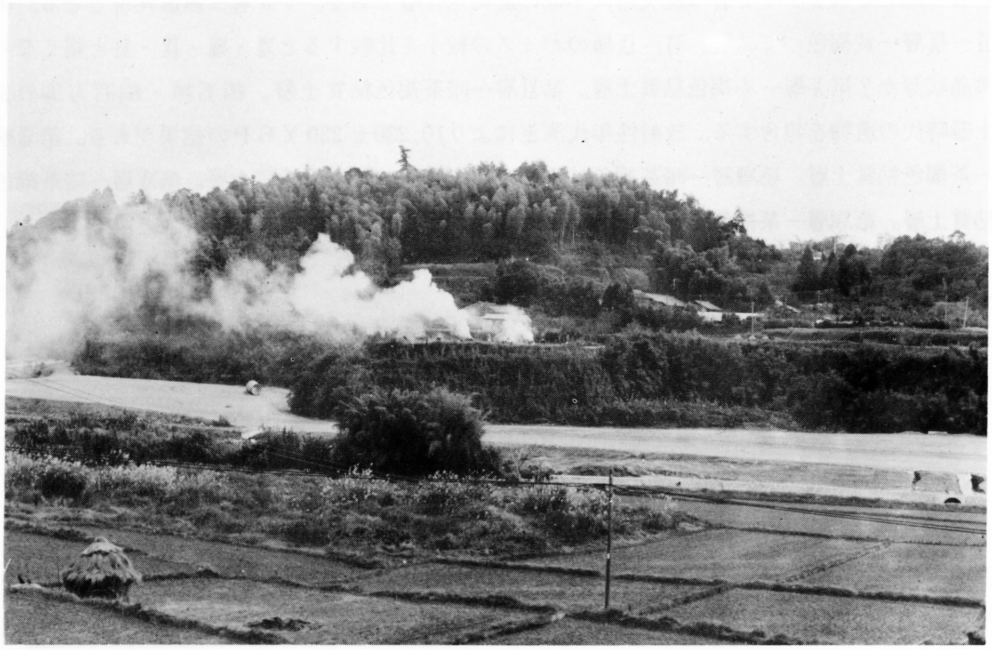
4．むすび

加治屋園遺跡は，層位的に先土器時代から縄文時代・前期・中期・後期・古墳・歴史時代と，下部から上部にみられる。また，これらの文化層はアカホヤ火山炭，桜島より噴出した薩摩火山灰など火山灰で分けられ，土器編年に役立つ資料を提供している。

先土器時代の遺跡は県内でも少なく，隣の加栗山遺跡をはじめ上場遺跡・石峰遺跡等10数例みられるだけである。また，土器の出土した遺跡はなお少ない。本遺跡は石器の種類が多いのも一つの特徴である。細石刃核にしても黒曜石と頁岩類とがあり，黒曜石は舟野型と矢出川・野岳型を呈し，頁岩類は石材上側面調整のいらないもので加治屋園遺跡独特の技法がみられる。

縄文時代は塞ノ神B式土器がⅤa層に出土し，三代寺遺跡と同様に円筒土器と口縁部が外反するものとがあり，また，轟式土器がⅢc層に並木式土器や岩崎式土器等はⅢa層に出土し，前期から後期までみられる。

加治屋園遺跡は，先土器時代から古墳・歴史時代と多期にわたり生活しやすい地であったといえよう。



加　治　屋　園　遺　跡

37．加　栗　山　遺　跡

1．所在地　鹿児島市川上町字加栗山字野久保

2．環　境

遺跡は緑ヶ丘台地を基部として南へ延びた長さ210ｍ，幅80mの舌状台地に立地する。標高約174ｍの基部を最頂部として，南へ緩傾斜する平坦地となる。

台地はシラスを基盤とし，西側は長井田川によって浸蝕された深い谷が枝状に入り乱れ，しかも谷との比高差約60mを測り垂直な崖となる。東側は緩傾斜をもって，楕木川によって形成された開折谷ともいえる狭い水田地帯を経て，対岸の吉野台地へ続く。南側は舌状台地の先端部で急な崖となり谷が形成され比高差は80mとなる。北側は台地の基部で，小谷を経て緑ヶ丘台地へ連なる。

3．土　層

台地を形成する地層は，吉野軽石流・坂元軽石流（シラス）の新期火山灰層を基盤とし，その上位に本遺跡の遺構・遺物を包含する層（中世山城・縄文時代前期・縄文時代早期・先土器時代の４文化層）が観察された。

第Ⅰ層―表土層。中世山城の遺構・遺物包含層である。第Ⅱ層―茶褐色砂層。第Ⅲ層―黄褐色砂質土層。下部にパミスがブロック状にみられる。通称アカホヤ層と呼ばれる。その起源は鬼界カルデラに求められ，6050～6400ＹＢＰの年代が与えられている。縄文時代前期の曽畑式土器を包含する。第Ⅳ層―青灰色粘質土層。第Ⅴ層―パミスを含む黒褐色粘質土層。この層は２層に細分される。Ⅴａ層は縄文時代早期の遺物包含層である。Ⅴｂ層は無遺物層となる。第Ⅵ～Ⅸ層―黄褐色パミス層。Ⅵ～Ⅸ層のパミスの粒子を比較するとⅦ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅵと粗くなる。桜島起源か？第Ⅹ層―赤褐色粘質土層。第Ⅺ層―暗茶褐色粘質土層。細石核・細石刃等の先土器時代の遺物を包含する。放射性年代測定により10.230±220ＹＢＰの結果がある。第Ⅻ層―茶褐色粘質土層。第XIII層―暗茶褐色粘質土層。第XIV層―茶褐色粘質土層。第XV層―暗茶褐色粘質土層。第XVI層―茶褐色粘土層。第XVII層―黄褐色火山灰砂礫層。以下シラスと続く。

加　栗　山　遺　跡

先　土　器　時　代

1．遺　構

遺構の検出はみられなかったが，遺物の出土状況はまとまりをもって構成された(ユニット)。このユニットは38ヶ所を数え，また，石材・石器の差異により大きく4つのユニット群に分かれた。38ユニットの各々のユニットには，出土遺物の種類，石材，範囲等に差異を認められた。また，礫群といえる程の集中はないが，ユニットに共伴して礫が検出された。遺物と礫の範囲は一致する。

2．遺　物

出土遺物は総数7万点弱で，石器として，細石刃・細石刃核・掻器・削器・ナイフ形石器・石鏃・磨製石斧・大型加工台形様石・剝片等が出土した。石材は黒曜石が主を示めチャート・疑灰岩・石英・頁岩等を用いている。細石刃は2532点出土し，黒曜石・凝灰岩・砂岩・頁岩・チャート等があり，石材の相違によって形態が異なる。三部切截手法が用いられている。細石刃核は総計349点出土し，その中で黒曜石製は279点である。凝灰岩は扁平礫を素材とし，折断による分割で打面調整し，細石刃核として利用したものである。ナイフ形石器は石英質であり，他の遺物の出土状況と若干の差異がみられる。石鏃は13点出土し，黒曜石・砂岩・チャート・石英・硬質頁岩等があげられ，器種は平基式の三角形鏃と，基部の窪んだ凹基式の石鏃の二形態に大別され，遺跡の台地全体に散在した。大型加工台形様石は輝石安山岩の自然石を素材とする面どりをした大形の台形様石で，平坦面に2ヶ所研磨痕がみられ，周囲は全て敲打により整形されている。石皿としての利用が考えられる。磨製石斧は基部が平坦で両側縁はほぼ平行する短冊形の石斧である。丹念な研磨が施こされている。以上の石器が特徴のあるものとしてあげられる。石鏃・石斧・台形石は縄文的文化の様相が強く，先土器時代～縄文時代に移り変わる過渡期の遺物としての特徴をもっている様に思われる。

縄　文　時　代

本遺跡の縄文時代の出土土器には，早期を主体に前期の土器がある。層位的には各々，Ⅴa層，Ⅲa層が遺物包含層となる。現代の耕作や，中世山城の構築時に一部攪乱を受けている部分もあるが，ほぼ舌状台地全域にわたって遺物包含層は残存していた。

1．遺　構

Ⓐ竪穴住居址　舌状台地の中央部を中心として縄文時代早期の竪穴住居址17基が発見された。XⅣ号住居址は，他の住居址の配置と比較して分布もかけ離れ，形状も不定形となる。住居址周辺は石坂式土器の分布圏であり石坂期の住居址に想定している。XⅣ号住居址を除いた他の住居址の分布状態は，吉田式・前平式土器の分布と一致し，中央部に広場的空間地と土坑群をとり囲むように孤状に分布していた。これらの住居址について若干述べたい。

各々の住居址は規模・平面プラン・内部構造など形態に差異が認められる。また，単基（Ⅰ～Ⅶ・Ⅹ・XIII・XVI・XVII）と重複（VIII・IX・XI・XII）が存在した。住居址の平面プランは方形を基本とし，1.6×1.9mの規模の小さいⅤ号住居址，5.1×2.8mから本遺跡で最も大きい長方形のⅦ号住居址がある。内部構造にはⅣ号住居址を代表とする径10cm程度の壁柱穴が30個以上検出されるもの，Ⅹ号住居址のごとく壁溝を有するもの，Ⅲ号住居址の柱穴のみの住居址があり，内部構造は，３つの形態に分けられる。さらにⅩ号住居址は，床面に平行する２列の溝と壁溝を有し，建て増しなど多慮すべき遺構であった。

住居址内出土の土器は大半が覆土中の小破片である。大半が前平式土器に比定されるものであるが，一部吉田式の土器もあり，また，周辺からは吉田・前平式土器の分布と一致することは住居址の時代の決め手と成り得よう。円筒土器である比較的に時間的に土器形式上，差の少ない吉田・前平式期に相当するものと考えられ，形態の違いや重複する住居址なども同様に，比較的接近した時間での関係として，集落の定着と移動のくり返しが行われていたと理解したい。

Ⓑ土坑　土坑の分布状況は住居址群に囲まれ，台地の中央部に集中してみられる。土坑は単独・土坑や住居址との重複があり，数基の土坑が群として２ヶ所に配される。

土坑の形態は，連穴土坑（土坑検出面で小円形と略隅丸方形の別個体の掘り込みが隣接するが，底面は同一となり，ブリッジによって２つの土坑がトンネルで連なっている）33基と，一般的な掘り込みの土坑45基が発見された。ただし，重複する土坑が多く正確な数は不明である。連穴土坑については特殊な形状を呈し，東京都田中谷戸遺跡に類例をみるのみで正確な用途は定かでないが炉穴として理解したい。しかし，確かなデータは得られず，日常の調理場や土器作り，墓制・祭祀に関する遺構など多様な機能が予想され，今後の課題としてとらえたい。

Ⓒ集石　集石は，土器の分布状況と同様に全域に分散し，17基が発見された。礫は１m四方に集中するもの，数個の礫を小範囲に集めたもの，バラツキがありまとまりのないもの，落ち込みを伴ったものがある。礫は拳大や幼児頭大の円・角礫の自然石が利用されている。礫には火を受けた痕跡が残っているものが一部観察される。調理場の用途が考えられる。

２．遺　物

出土遺物には，Ⅴａ層を遺物包含層とし，縄文時代早期の円筒土器である石坂式，吉田式，前平式土器を主体に貝殻条痕文土器や，Ⅲａ層出土の縄文時代前期の曽畑式土器がある。石坂式土器は台地の中央より南に，吉田式・前平式土器は北側半分に出土し，分布において台地を２分していた。

石器には，石鏃・磨製石斧・打製石斧・石匙・削器・磨石・石核・石皿など多数量出土した。その他，円盤状軽石製品や穿孔のある土製品，装身具・陰陽石など発見された。

中　世　山　城

山城は浸蝕された崖に囲まれた舌状台地の地形を最大限に利用したものである。中央部に曲

輪Ⅱ，東側一段高い曲輪Ⅰ，曲輪Ⅱ以南に曲輪Ⅲの平坦地を造り，東側には通称馬場といわれる腰曲輪からなる。

1．遺　構

ⓐ掘立柱建物跡　曲輪Ⅰ・Ⅱより多数のピットが検出された。この中で掘立柱建物跡として明確に想定可能なものは，２間×３間と２間×２間に庇をもつ２基があった。

ⓑ堀　堀は舌状台地のほぼ中央部を東西に分断する堀Ⅰと東側の傾斜面を削平した腰曲輪の台地の接点に南北に走る堀Ⅱがある。

堀Ⅰ　堀Ⅰは台地のほぼ中央部にあたり，堀をつくることで台地を分断し，曲輪を区画したものと思われる。堀は東西に走り，幅は５～６ｍ，深さは１～４ｍを測り，底面は西側へ傾斜する。堀断面は逆台形状を呈しシラスを掘り込む。一部段掘をなす部分がある。

堀Ⅱ　台地東側の傾斜面を削平して作り出した幅12m，長さ約140ｍの腰曲輪に検出された。堀Ⅱは幅４～５ｍ，床面１～1.5ｍ，深さ２～３ｍで断面は逆台形の箱堀となる。全長は両端が不明な為に確認できなかったが，現存長は136ｍを測り北側へ傾斜する。また，堀Ⅱが破棄されたのち曲輪Ⅱへの登口と思われる古道や排水溝も重複して構築されていた。

柵列　堀Ⅰの北側縁辺に東西に走り，長さ22.5mにわたり平行する２列の柵列が検出された。柵跡は直径25～30cm，深さ10～60cmのもので合計58個である。各柵跡間は70～80cmの間隔で設け，各柵列は1.4～1.5ｍの幅となる。

溝状遺構　台地の縁辺部に台地を巡る幅20～40cm，深さ10～50cmの溝状遺構が検出された。

土塁　曲輪Ⅰを構築する際，自然地形を残した土塁がわずかに残存していた。

その他　炉址４基や礫溜り２基，井戸状遺構が発見された。

2．遺　物

遺物には，土師器・青磁・白磁・染付・備前焼・石臼・湯釜・かんざし等が出土したが量的には少ない。土師器は全て糸切り底である。青磁・白磁は13～14世紀前半のものから15～16世紀，染付は嘉靖様式のものを含め15～16世紀のものが主流であった。

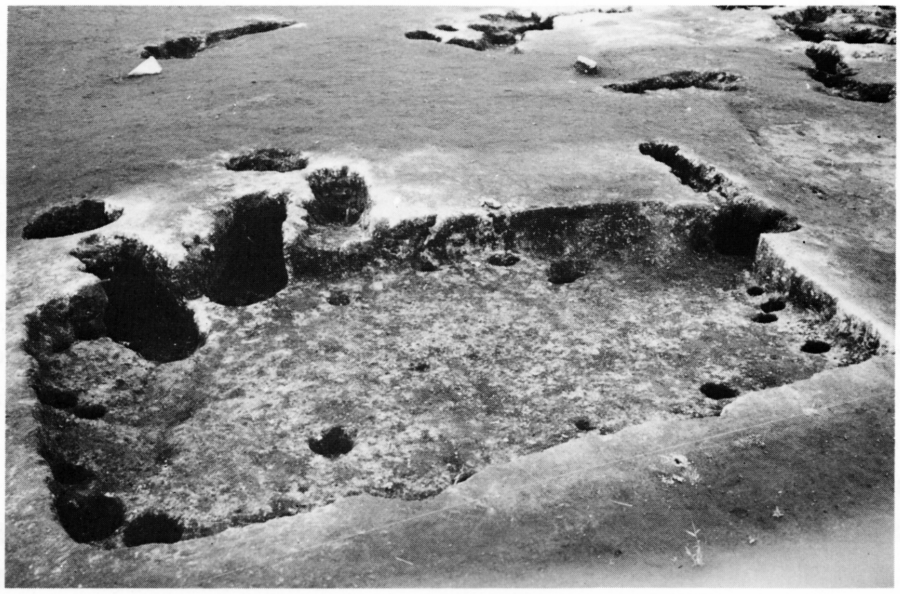
中世山城としての加栗山遺跡の城主の比定の問題であるが，本遺跡を含む地域は川上町である。この川上に由来する人名は「鹿児島県史」によれば，島津氏第15代藩主島津貞久の長庶子頼久を祖とし，江戸時代まで島津氏の重臣としての地位を保った名家であった。そして，２代（頼久の子親久）が川上を拝領し，川上姓を称したとも伝えている。このほか「川上氏系図」「薩藩旧記雑録」には『勝久公遣兵攻川上城……』や『久利在川上城時有失火……』等の記事が散見され，川上城の存在したことがうかがわれる。しかし，この記事にいう川上城が本遺跡であるかについては，断定はできないが，有力な地であることは言うに及ばない。

3．むすび

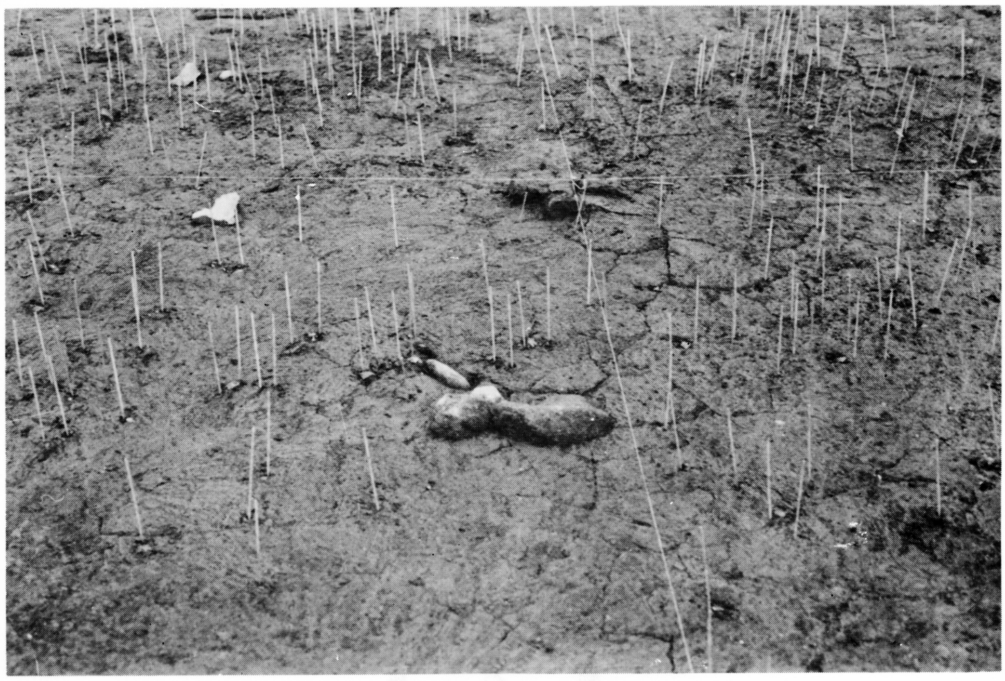
発掘調査の結果，加栗山遺跡は，先土器時代，縄文時代早・前期，中世山城の複合遺跡であることが判明し，舌状台地の約１万㎡の全面発掘は，各時代の遺構・遺物を全体的な視野でとらえられ，厖大な資料を得た。

貴重な遺跡であったので遺跡の永久保存が検討されたが，記録的保存にすることになった。しかし，発掘調査方法，考古学者の現地指導，地質，土壌，保存科学等の方法をとり入れて発掘調査に一時期を画するものとなった。ことに火山灰の多画的な検討や，集石・土層の科学処理等，多くの成果を得た。また，山城発掘，縄文時代早期の集落址，先土器時代の豊富な発掘成果は，今後の研究に多くの資料を提供することになった。

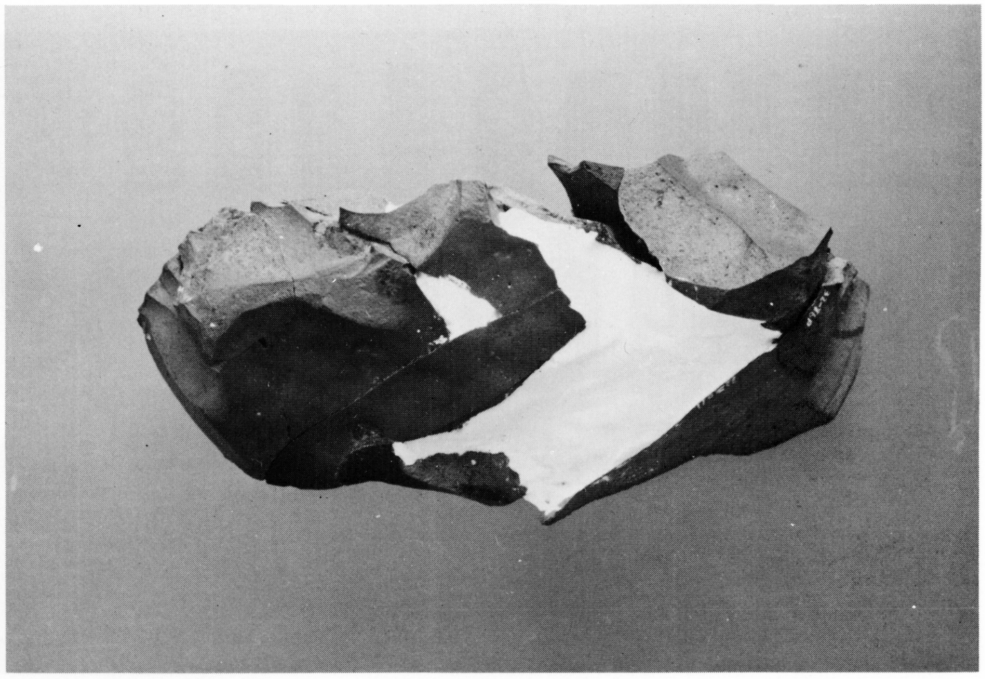
中　世　山　城（曲輪１の炉址及び柱穴）



縄文早期竪穴住居址Ⅶ号及び連穴土坑

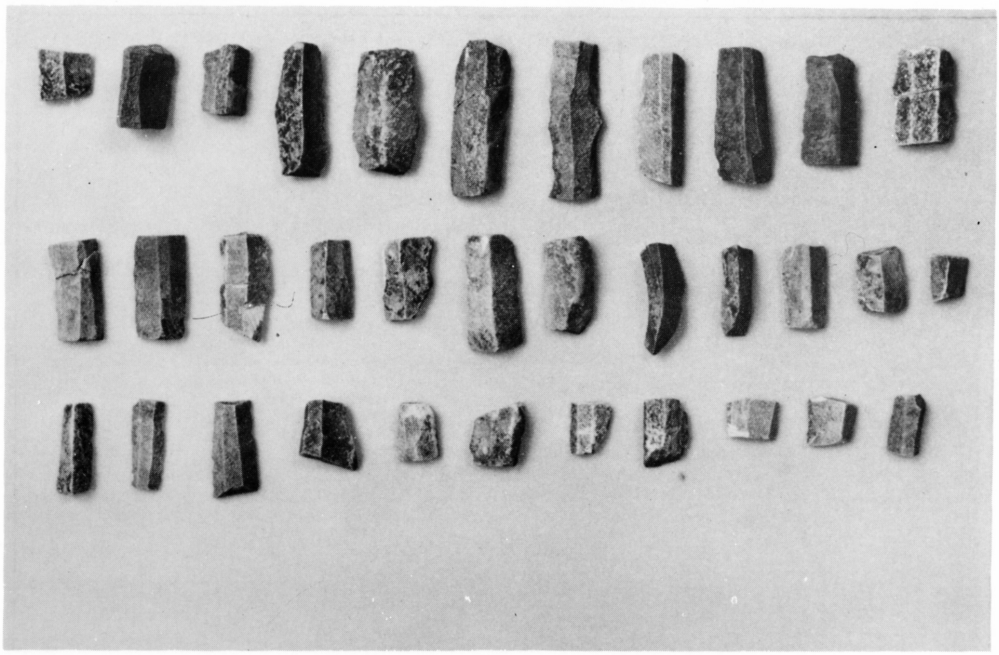


先　土　器　時　代（細石器遺物出土状況）



先　土　器　時　代（接合資料）

細　石　核



細　石　刃

38. 神 ノ 木 山 遺 跡

神ノ木山遺跡は，鹿児島市下田町字神ノ木山に所在する。日本道路公団の九州縦貫自動車道の中心杭でいえば，ＳＴＡＮＯ 212付近の開拓された畑地である。

このあたりは，シラス台地が浸蝕を受けてできた開析谷が入り込み複雑な地形となる。本遺跡の所在するところは，北西・南東及び南側とも深い谷となり，幅約70mの馬背状を呈する。標高は約113ｍを測る。現況は傾斜面を削平した狭い段々畑が尾根を中心に左右に点在し，その多くは荒地となっている。

調査は，九州縦貫自動車道の中心杭ＳＴＡ 212を中心に２ｍの方眼を設定し，２ｍ×２ｍ及び２ｍ×４ｍを基本とし，市松状に掘り下げた。

その結果，10cm～30cmの耕作土の下はシラス層となり，遺物は１点も出土しなかった。

このような状況は各トレンチとも同様であるが，一部に二次堆積による黒色土層が観察されたものの，その地点は流水路状となる地形のためであった。

神　ノ　木　山　遺　跡

各時代の概要

旧　石　器　時　代

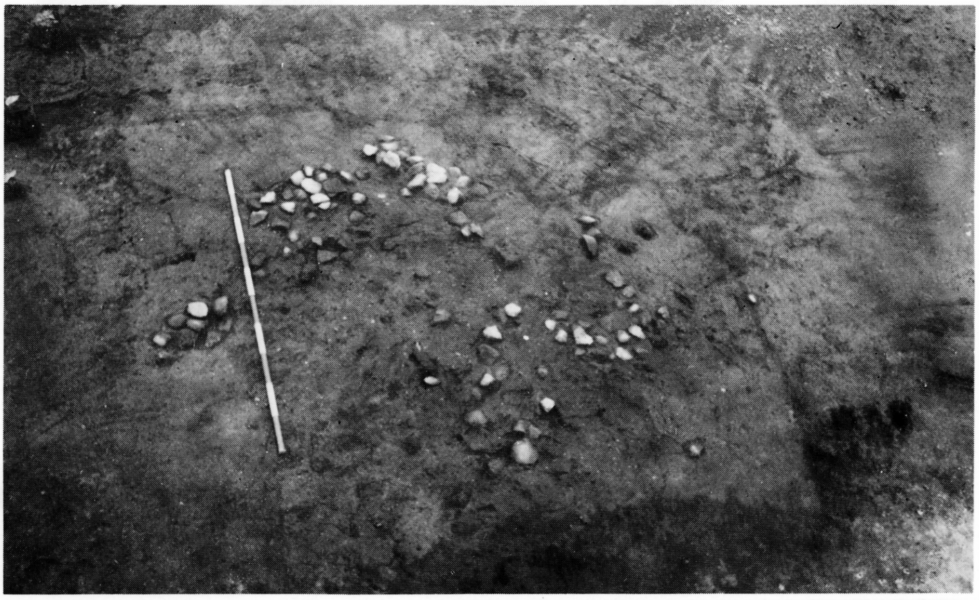
世界で最も古い人類は，今から約200万年ぐらい前，日本では10万年ぐらい前に出現したといわれている。最初の人類が出現した時から，現在よりも1万年ぐらい前までを「旧石器時代」という。

鹿児島県内で人類が生活するようになったのは，出水市上場遺跡や指宿市小牧遺跡の調査から約2万年前と推定されている。

このころの人々は，植物の栽培法を知らず狩猟や採集によって食糧を得ていた。また，道具は石を打ち欠いて作った石器を使った。土器はこの時代の終わりごろになってつくられるようになった。

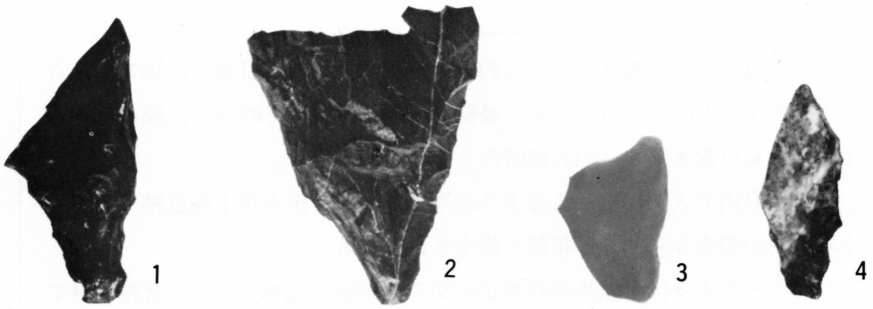
九州縦貫自動車道の調査では9ヶ所の遺跡が発見され，木場A遺跡では約2万年前のナイフ形石器が，また，加栗山・加治屋園遺跡は，旧石器時代から縄文時代へ移りかわる時代の石器が多く出土し，今までわからなかった時代を調べるのにとても貴重なものになった。

― 遺　　構 ―

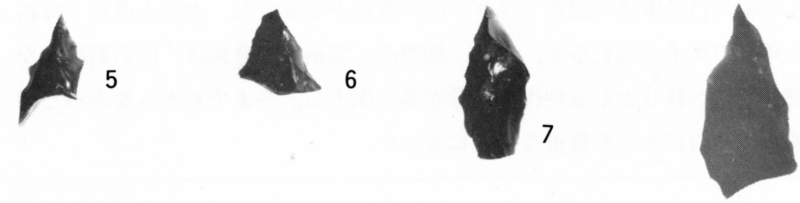


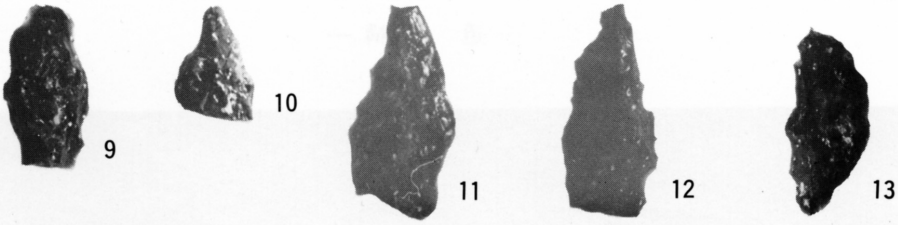
集　　石（木場A遺跡）

集石……径2m程の楕円形状に安山岩の大小の円礫・角礫を集めたものである。礫の周辺に炭化物がみられることや礫は火をうけた跡があるから炉などに使用された可能性もある。



ナ イ フ 形 石 器



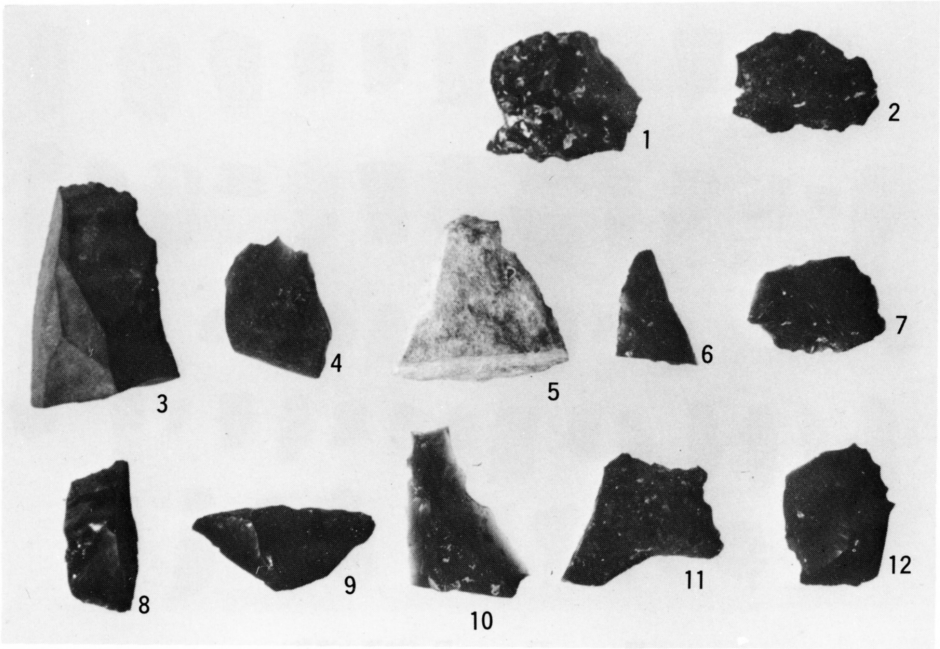


尖　頭　器

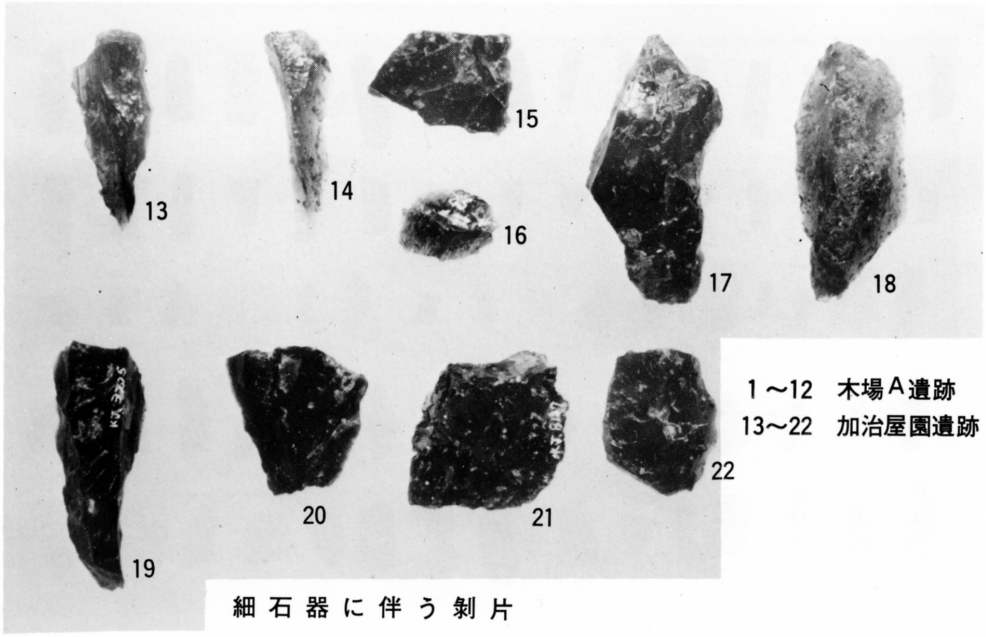
1・2　木場A遺跡
3・5～17　木場A－2遺跡
4　加栗山遺跡

ナイフ形石器……木の先につけて突いたり，ナイフのようにものを切ったりする石器である。旧石器時代の代表的な石器である。

尖頭器……先端が鋭く尖がった石器で，木の先にとりつけヤリとして使った石器である。



ナイフ形石器に伴う剝片



1～12　木場A遺跡
13～22　加治屋園遺跡

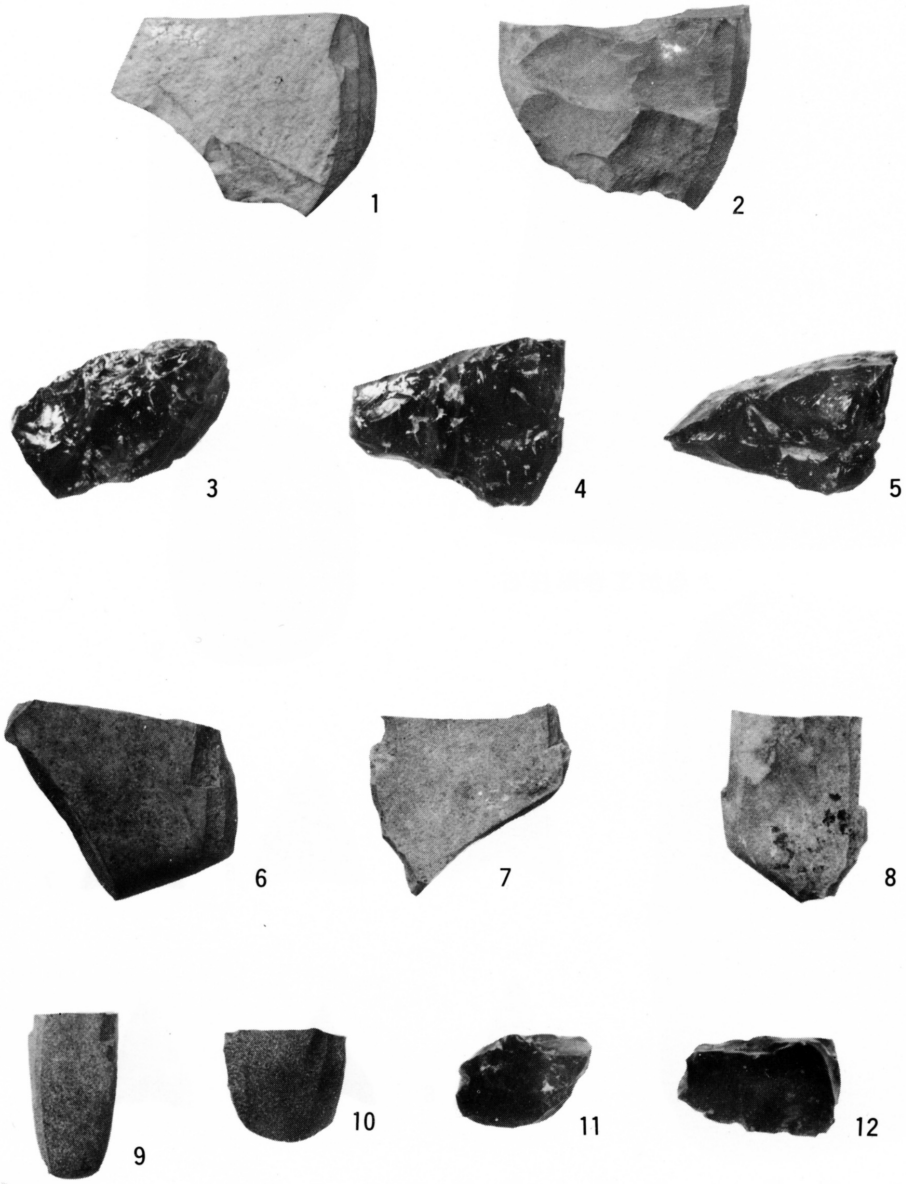
細石器に伴う剝片

剝片……原石を打ちかいて出来た薄い石器のことで，これから加工を施こしていろんな石器を作ることが多い。木場A遺跡の剝片は約2万年前の剝片で，加治屋園遺跡の剝片は約1万年前のものである。

細　　石　　刃（加栗山遺跡）

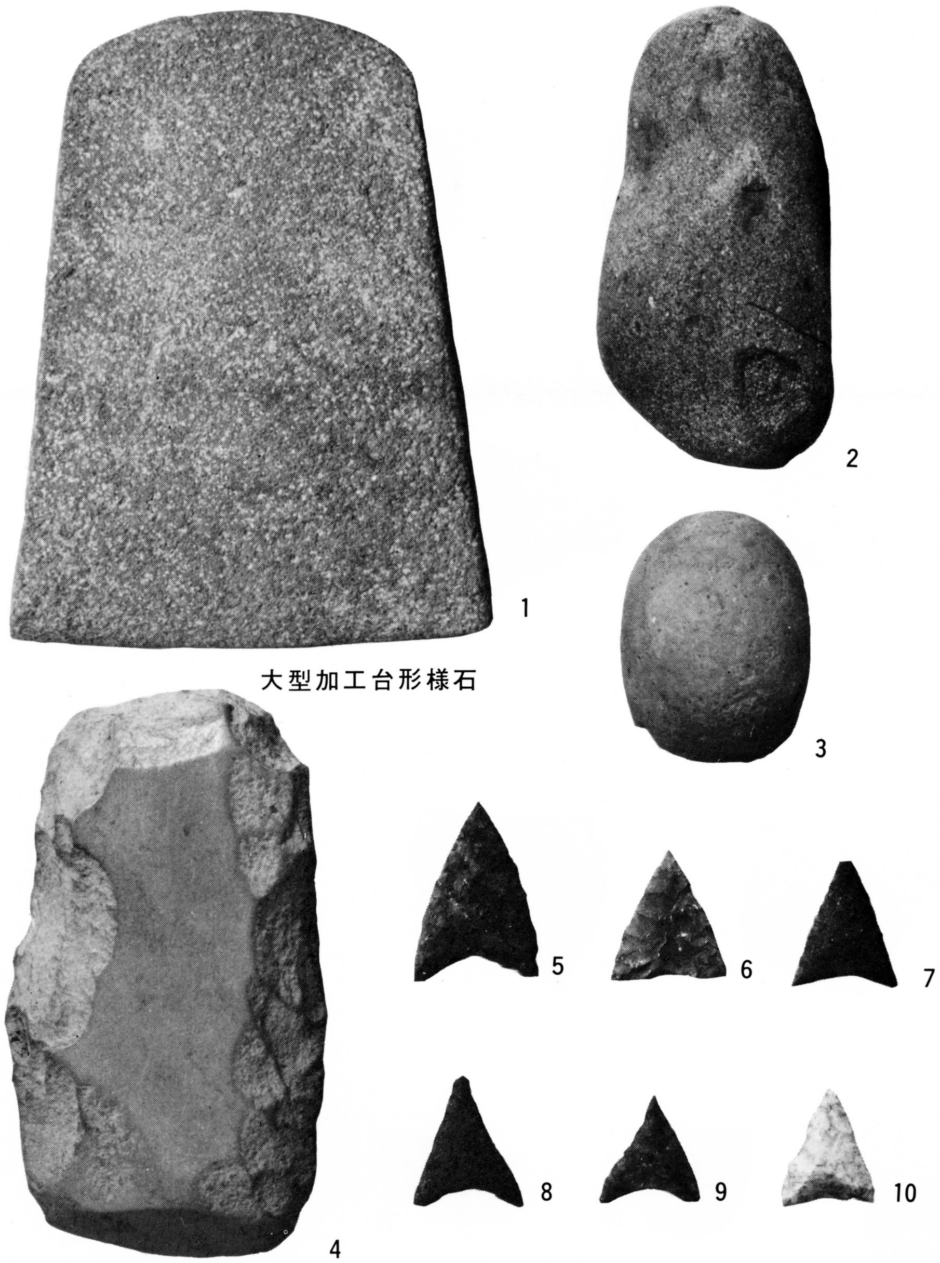
細　　石　　刃（加治屋園遺跡）

細石刃……長さ１～２cm，幅３～５mmぐらいの薄い石器でカミソリの刃みたいなものである。外国で骨に埋めたまま発見されていることから，木や骨に植えこんで使ったものと思われる。



細　石　刃　核　　1～5　加栗山遺跡
6～12　加治屋園遺跡

細石刃核……細石刃を作り出すための石器であり，この石器が多く出てくることによって，細石刃を作った場所がわかる。



大型加工台形様石

石　斧　　加栗山遺跡出土の石器

石槌……石器を作るときに用いるハンマーのことである。

石斧……木の伐採等に用いる斧であり，縄文時代の主な石器でこれは磨かれている。

大型加工台形様石……用途は不明であるが，磨いた部分等から石皿の可能性もある。

石鏃……縄文時代の遺物で弓矢の先に付けるものであるが，加栗山遺跡では細石器と共伴している。

縄　文　時　代

約1万年前から約2,000年前ぐらいまでのおよそ8,000年間は「縄文時代」といい，早期・前期・中期・後期・晩期の5時期に区分していますが，最近では早期の前に草創期をおくこともある。

縄文時代は，それまでの寒冷な気候がしだいに暖かくなり，氷や雪が解けて海面があがったので，それまで大陸と陸続きであった日本は四方を海に囲まれた島国となった。

植物は西日本ゴシイ，カシ類，東日本でクヌギ，ナラ類が多くなりました。木の実や草の根などを料理するようになり，土器作りの技術がすすみ，器形や文様も変化しました。今までの狩猟や採集に加えて漁撈も行われるようになった。

石器類は用途に応じたものがつくられ，また，動物の骨や角で釣針や銛などもつくられました。

まじないや祭りと，かかわりのある土偶・岩偶などは中期以降につくられるようになりました。

古代人は，岩陰の洞窟や，竪穴式住居で生活しました。

遺　　構

鹿児島県内で縄文時代の遺跡から発見される遺構には，竪穴住居址・集石・土坑・炉穴・貯蔵穴などがある。層を一枚一枚はいでいくと，方形や円形に周囲との土の色が違う場所があり，住居址や土坑（掘り込んだ穴）などがあることが解ります。遺構の時代の決め手は，遺構内や周囲から出土する土器の年代によって判断します。

遺　　物

遺物には，土器・石器(矢じり・石匙・削器・磨石・敲石・石皿など)・装身具・玩具などがある。地中に埋って出土する遺物は，上のものより下から出土するもののほうが時代は古い。火山灰土壌に厚く覆われた遺跡は，地表面に近い遺物包含層ほど，農耕や畑の開拓などによって壊されたり，攪乱されたりして消滅を受けやすいので，深くなるほど現在まで遺物包含層が残っていることが解る。

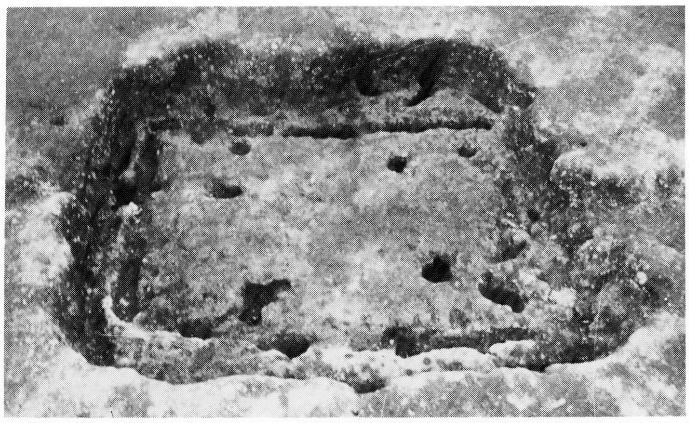
本県で発見されている縄文時代の遺跡は，早期・前期が多く，また，遺物の量も多い。それに比べて，縄文時代中期・後期・晩期の遺跡は少なく，遺物の数も少ない。

（注）遺物包含層―遺物や遺構が含まれている層のこと。

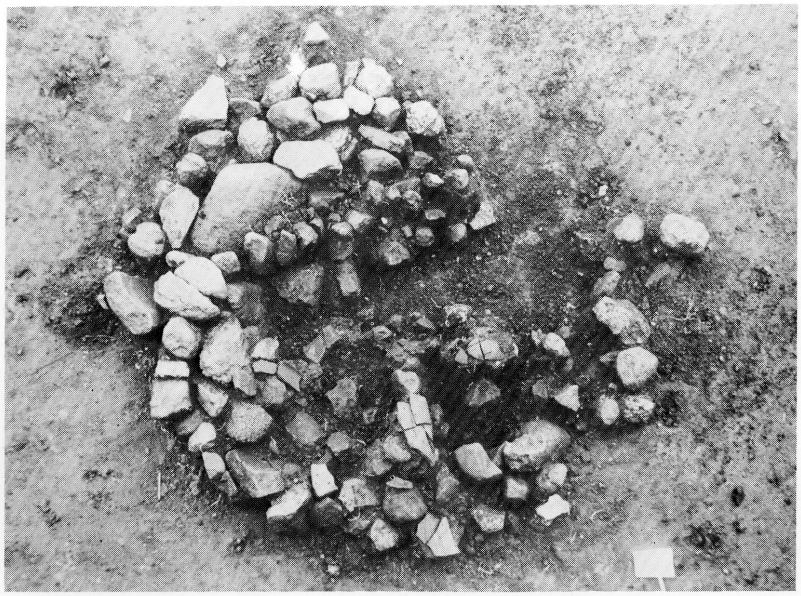
竪 穴 式 住 居 址 群（加栗山遺跡）

竪 穴 式 住 居 址（加栗山遺跡Ⅶ号住居址）

加栗山遺跡では，縄文時代早期（今から約8,000～9,000年前）の竪穴式住居址が計17基発見された。平面は方形で，床面には円柱穴あり。帯状の溝がつくられているのもあった。



竪　穴　式　住　居　址（加栗山遺跡X号住居址）



集　　石（加栗山遺跡集石Ⅰ）

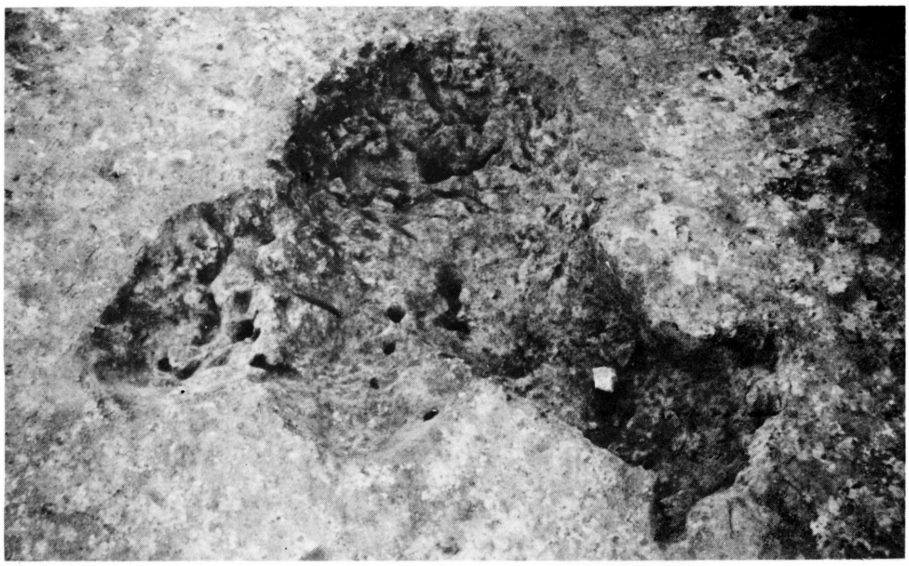
①は長径 2.7 m，短径 2.3 m の方形の竪穴式住居址で，深さ32cm。床面に26個の柱穴と，2本の平行する小さな溝がつくられている。住居の建て増しが考えられる資料です。

集石……握りこぶし大の自然の石を1ヶ所に集められたもの。火を受けて赤く変色しているものもある。調理用の施設とする考え方がある。

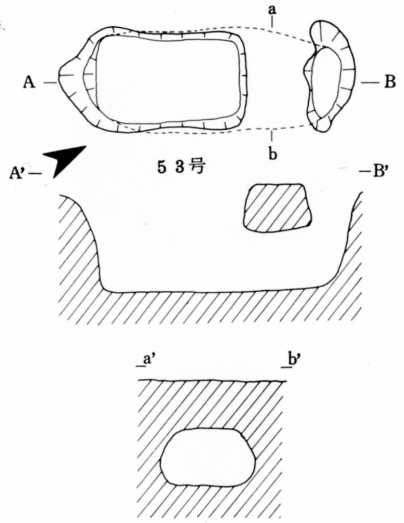
① 集　　石（三代寺遺跡）

② 集　　石（中尾田遺跡）

①は長径 1.6 m，短径 1 m で楕円形の穴の中に 5 ～10cmの石を用いてあった。
②は底面に20～30cmの扁平な石を花弁形に配置し，皿状をなしている。
いずれも，灰や炭は観察されていないが，調理用の施設ではないかと考えられている。
集石は，主に旧石器時代の終りごろから縄文時代早期・前期にかけて発見されている。



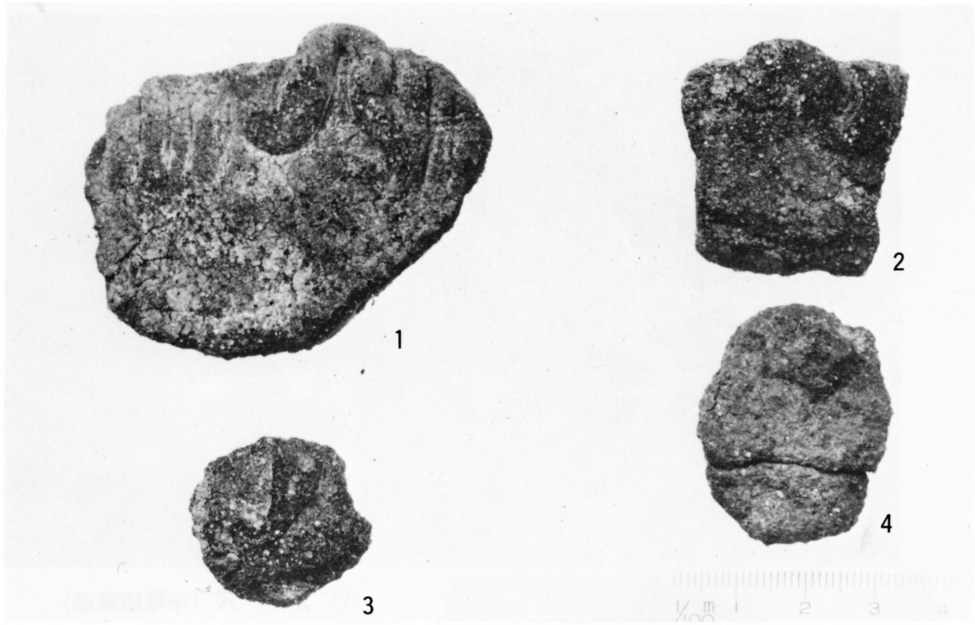
① 炉　　穴（中尾田遺跡）

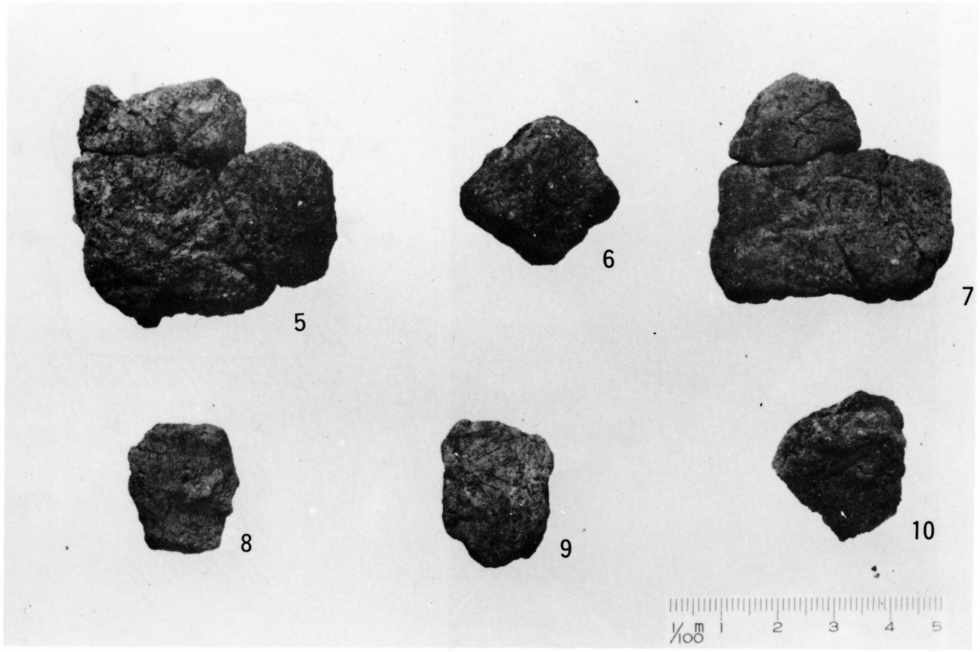


② 連穴土坑（加栗山遺跡）

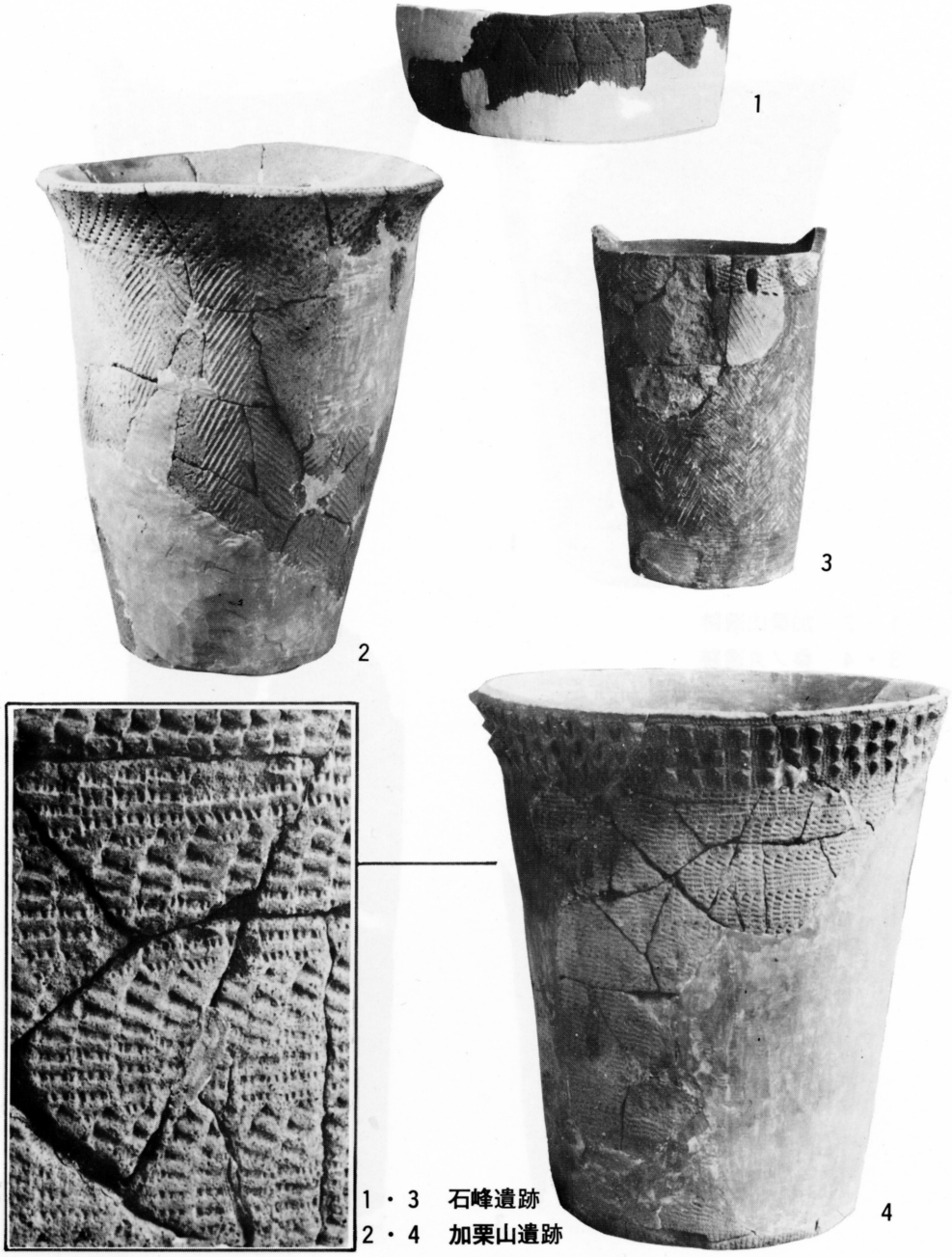
①は不定形をなしているが，4個の楕円形をした穴が重なって発見されたものである。柱穴の中には木炭片や木炭の粉末が多量にみられ，火をたいた跡と思われる。

②の土坑は，2個の穴がトンネルによって連らなっている。用途や性格は現在のところよく解らない。





粘土紐貼り付け文土器（加治屋園遺跡）　細石刃や細石器に伴って総数114点が出土した。破片のために器形は不明，土器は薄くて焼成が良いものと，厚くて焼成の悪いものがある。①は「S」字状に粘土紐を貼り付け，貝殻類似の施文具で刺突文を施す。その他，土器中に繊維状のものや，器面に繊維圧痕がみられる。本県最古の土器として注目される。



縄文時代早期　1…連点鋸歯文の円筒土器。3…石坂式土器・円筒土器で口縁部は外反し，波状口縁となる。2…石坂式土器。口縁部が直行する円筒土器である。施文具には貝殻を使用し，口縁部には押圧による羽状文，胴部には羽状の貝殻条痕文を施す。4…吉田式土器・円筒土器。口唇部に刻み目文，口縁部にクサビ形凸帯，胴部に貝殻押引き文を施す。

1

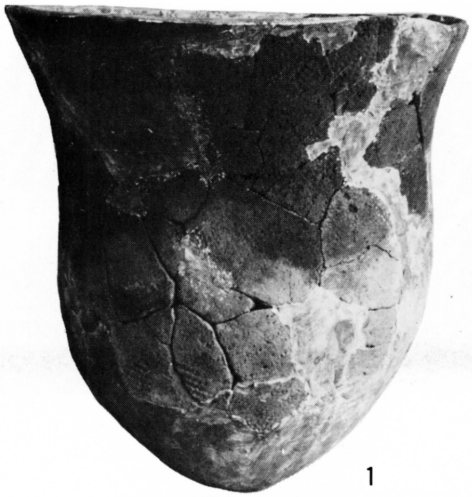
2

1・2　加栗山遺跡
3・4　桑ノ丸遺跡

3

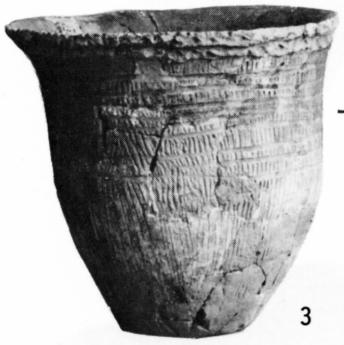
4

縄文時代早期　1…円筒土器の吉田式土器。2…角筒土器の吉田式系土器。口唇部は平坦で刻み目文，口縁部には三角形のクサビ形凸帯文，胴部は貝殻押引き文を施す。3…円筒土器の前平式土器。口縁端部に2段に縦位のキザミ目文，胴部は貝殻条痕文を施す。4…角筒土器の前平式土器。口縁端部に横位の押圧線文，胴部は貝殻条痕文と縦列線文の二重施文を施す。

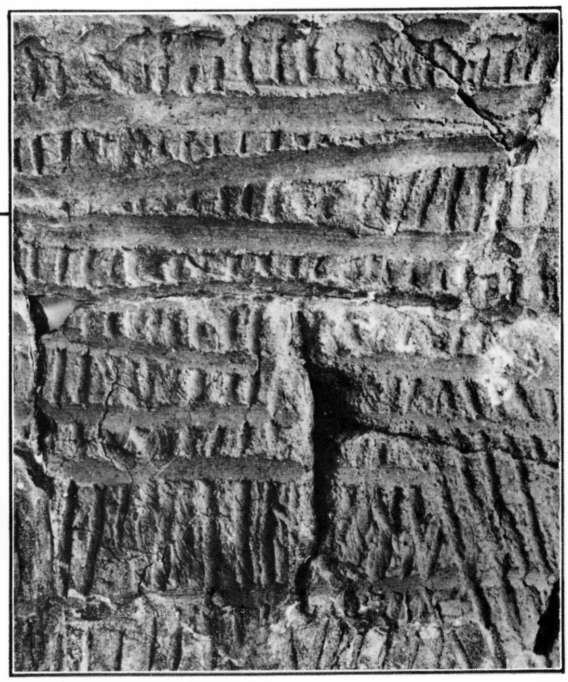


1

2



3



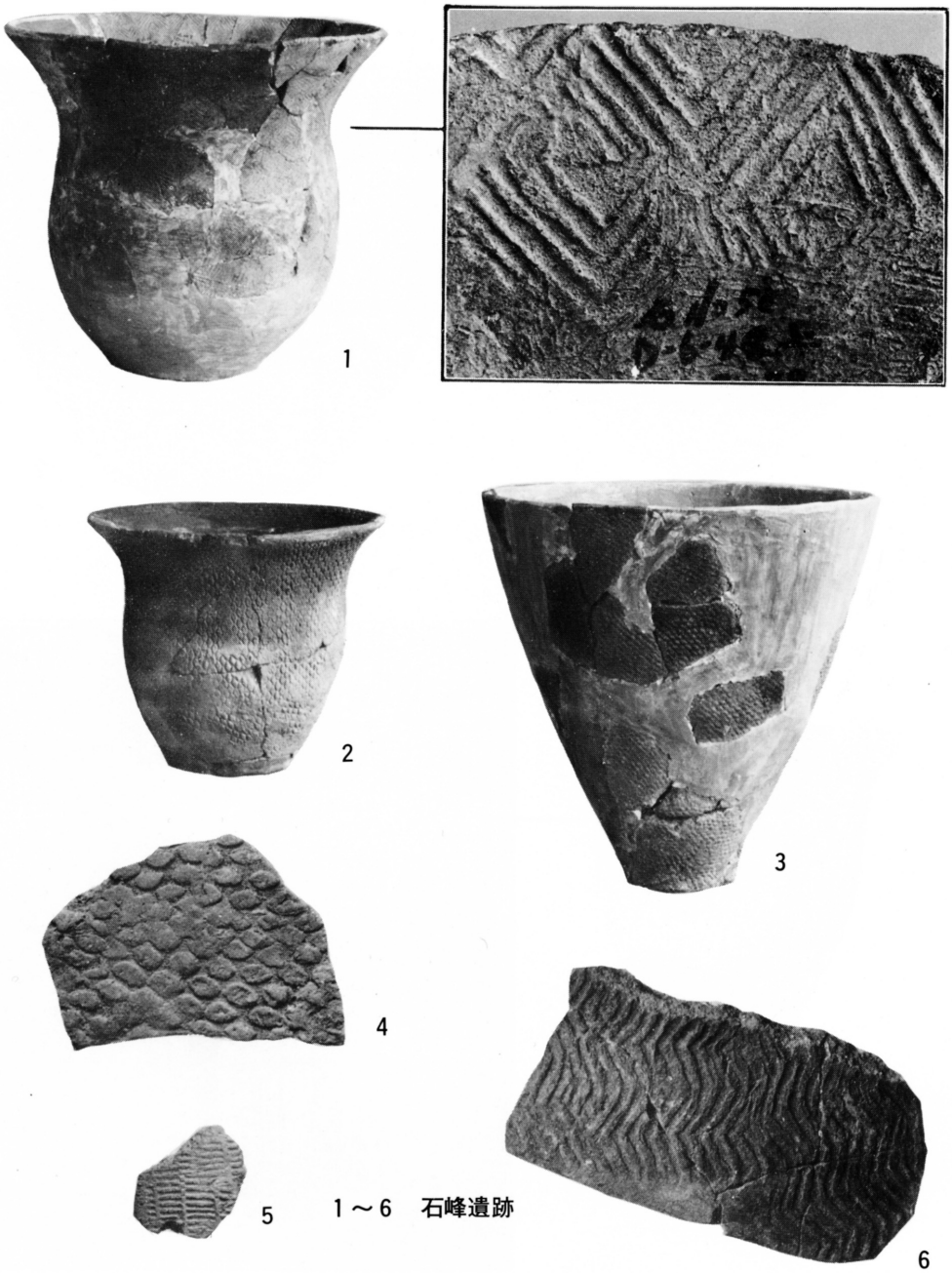
1・3　石峰遺跡
2　　木佐貫原遺跡

縄文時代早期

1…撚糸文土器。口径31cm，高さ32cmの尖底土器，胴部は張り頸部でしまり外反する口縁部。

2…撚糸文土器。

3…凸帯撚糸文土器。高さ20cm，刻目凸帯2条と廻転押捺した撚糸文，7～9条の凹線文。



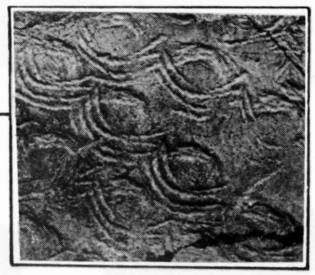
1～6　石峰遺跡

縄文時代早期（押形文土器）　棒状に菱形１，楕円２～４，格子５，山形６を彫り込み，原体（棒状施文具）を土器の表面に押しつけ回転させて文様を施す。

１は高さ22.5cm，２は高さ17cmで胴部は丸くふくらみ，頸部がしまり，外反する口縁部で平底。３は高さ25cm，平底で直行する口縁部となる。

1

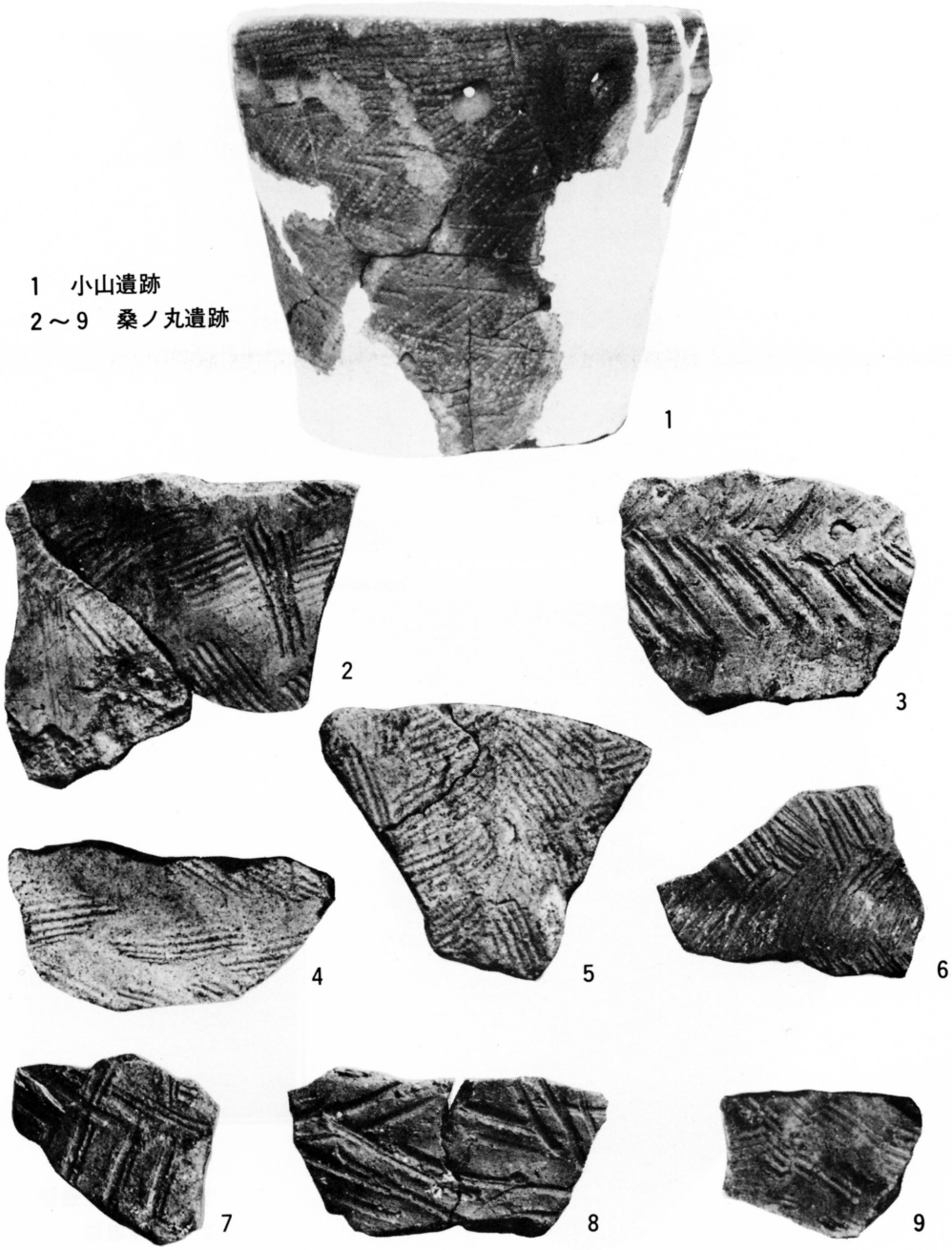
2



1　木佐貫原遺跡
2　石峰遺跡

縄文時代早期　1は押型文土器で，口径29.4cm。器形は胴部が「逆くの字」状に張り出し，稜をつくり出す。頸部はしまり，口縁部は外反する。外全面と口縁部内側に山形押型文を施す。2は石坂系土器である。器高49cm。胴部は張り出し，頸部はしまり，外反する口縁部で底部は丸底になる。口縁部と底部付近に楕円押圧文と胴部に変形撚糸文を施文とする。

1　小山遺跡
2～9　桑ノ丸遺跡



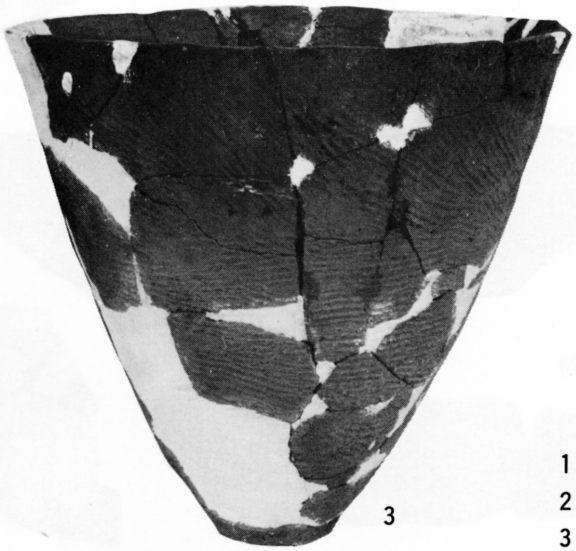
縄文時代早期（1…石坂式土器，2…桑ノ丸Ⅲ類土器）

1は円筒形の平底で器面には貝殻縁により綾杉状に施す。縦・横位の凸帯をつける。

2～9は破片のため器形は不明。施文具は貝殻か篦を用い，羽状や山形状に引っかいて文様を施す。今までにないタイプの文様で新資料である。

1

2



3

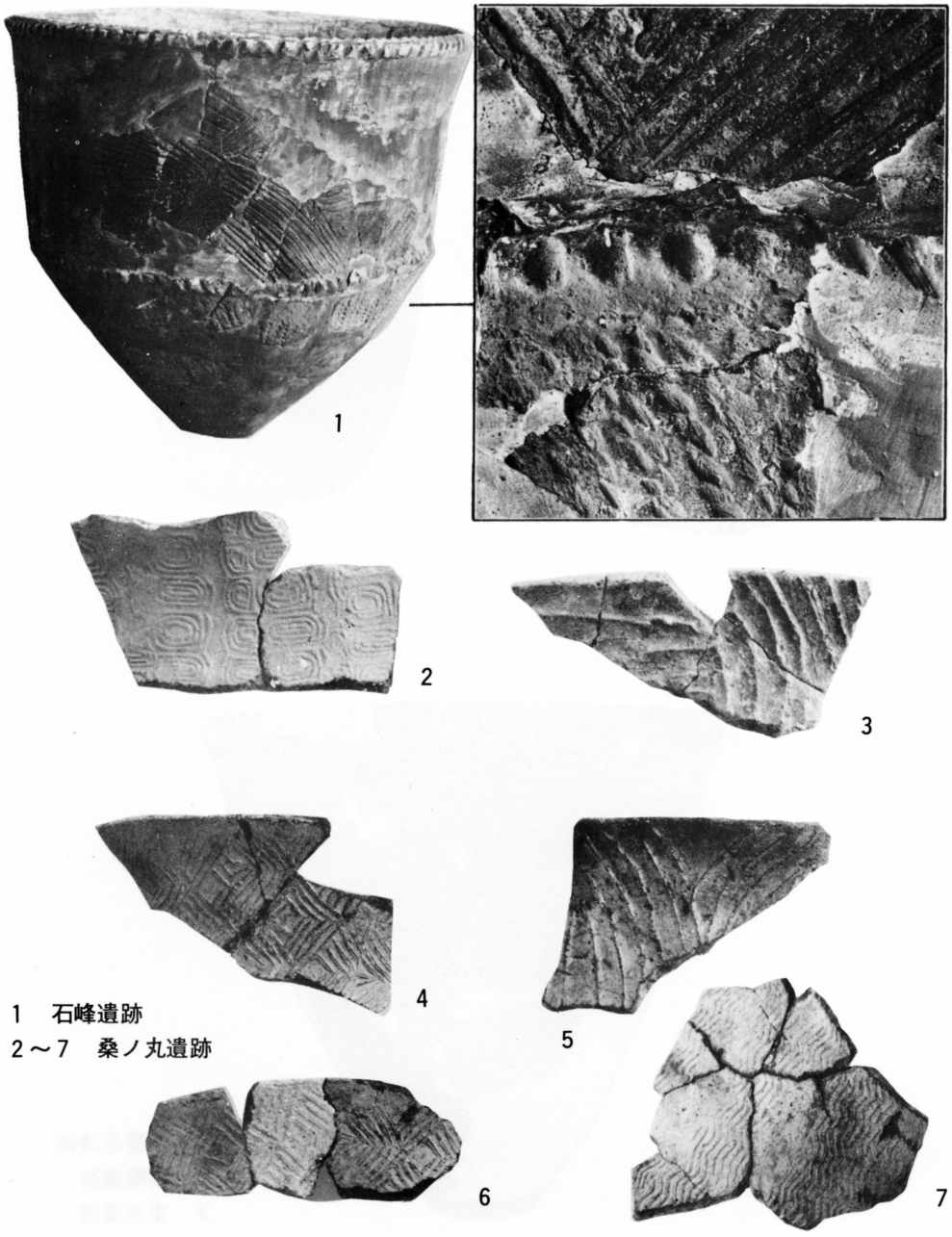
1　木屋原遺跡
2　石峰遺跡
3　東原遺跡

縄文時代早期

1は貼り付け凸帯条痕文土器。器高19cmの円筒土器。凸帯は刻目文，胴部は条痕を施す。

2は円筒形条痕文土器。器高約26cm。文様は口縁部に14～16条の貝殻条痕文を施す。

3は貝殻条痕文土器。器高約29cm。外開き口縁となる。器面全体に斜位・横位の貝殻条痕文。



1　石峰遺跡
2～7　桑ノ丸遺跡

縄文時代前期（手向山式土器）　1は器高約28cm。器形は僅かに内弯し発達した頸部と，底部へ向って細まる胴部との継目に刻目凸帯文を巡らす。この型式の土器は，押型文・幾何学沈線文・曲線文・隆帯文・縄文・撚糸文・絡縄凸帯などの文様要素のうち，2～3種類を配置施文する土器がある。2は重弧楕円文。3・5は隆帯文。4・6は菱形文。7は山形の押形文。

1

2

3

1～3　石峰遺跡

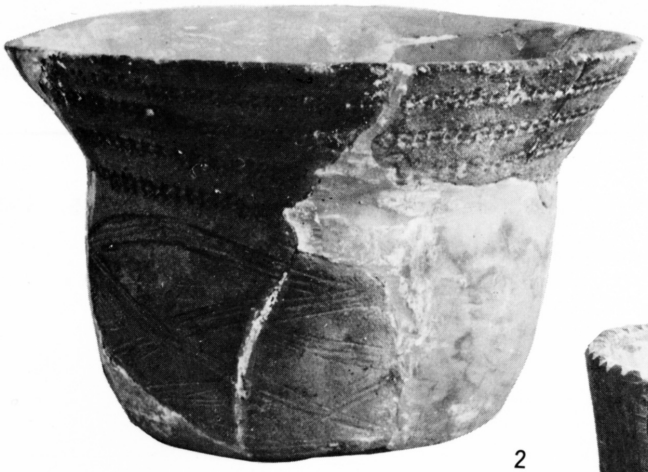
縄文時代前期（平栫式土器）　1…器高約22.5cm，2…器高約31cm，3…器高約40cm。

器形は頸部から口縁部へ外反し，4個の隆起部をもつ波状口縁となる。胴部はやや張り大きな平底になる。口縁部は肥厚帯を有し，土器の内面は平滑に篦磨きを施す。文様は，連点文・曲凹線文・幾何学凹線文・波状凹線文・結束縄文・絡縄凸帯を施す。

縄文時代前期（塞ノ神式土器）

基本器形は，ややふくらみのある円筒形の胴部にラッパ状に開いた口縁部がつく。文様は，連点文・幾何学文・網目文・撚糸文を施す。胴部が文様のみＡａ，文様が凹線文で囲まれるものＡｂが分類される。１～３は塞ノ神Ａａ，４は塞ノ神Ａｂと平栫式土器の中間形態。

1



2

3

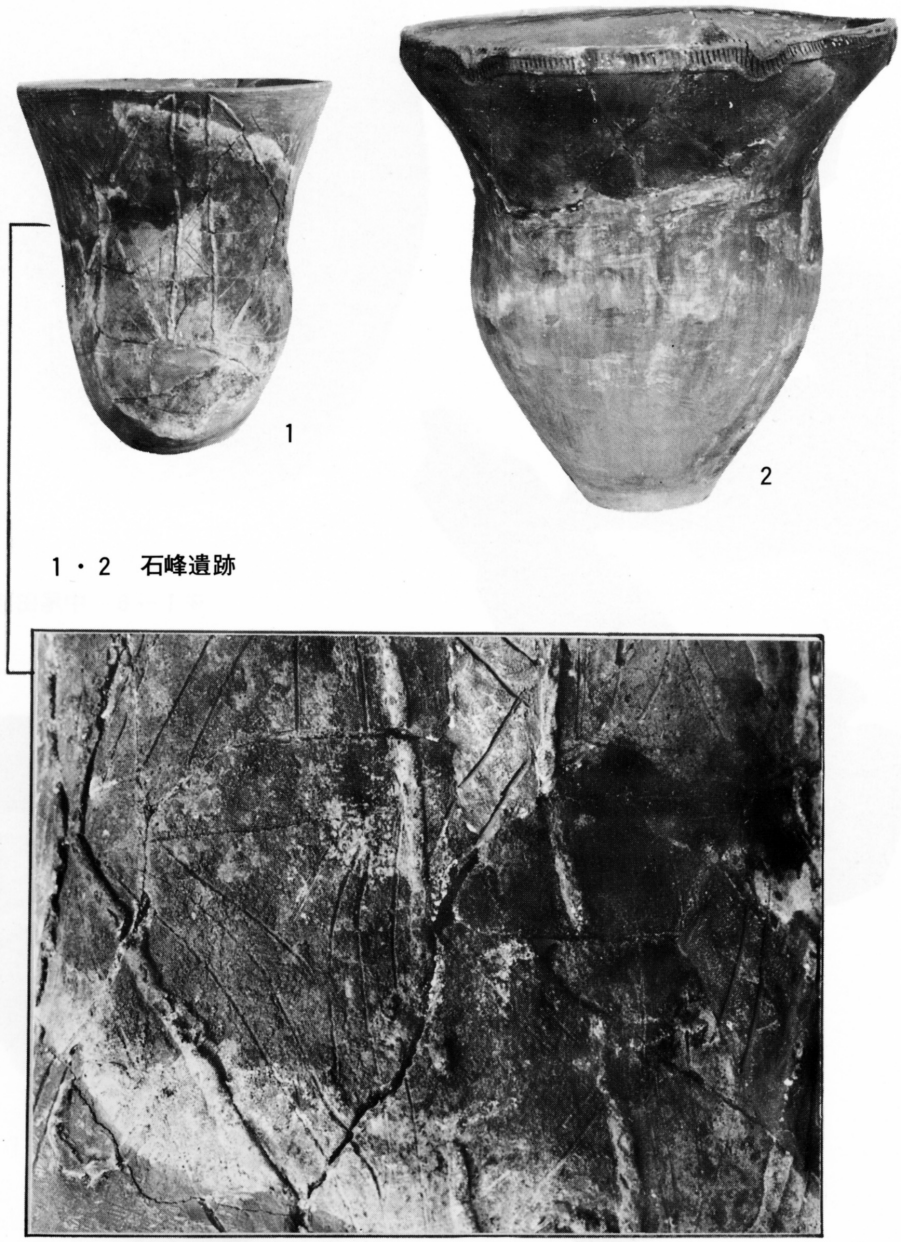
1～3　三代寺遺跡

縄文時代早期（塞ノ神B式土器）

器形としては胴部はやや丸味を帯びた円筒形となり，口縁部は「く」の字に外反する。文様は口縁部に貝殻腹縁の刺突文を巡らし，胴部は直線や曲線で縦位，菱形に文様を施す。塞ノ神A式に比べ粗雑な整形となる。3は小型の土器で口径 9.2 cm，凹線文と連点文を施す。

縄文時代前期（曽畑式土器）

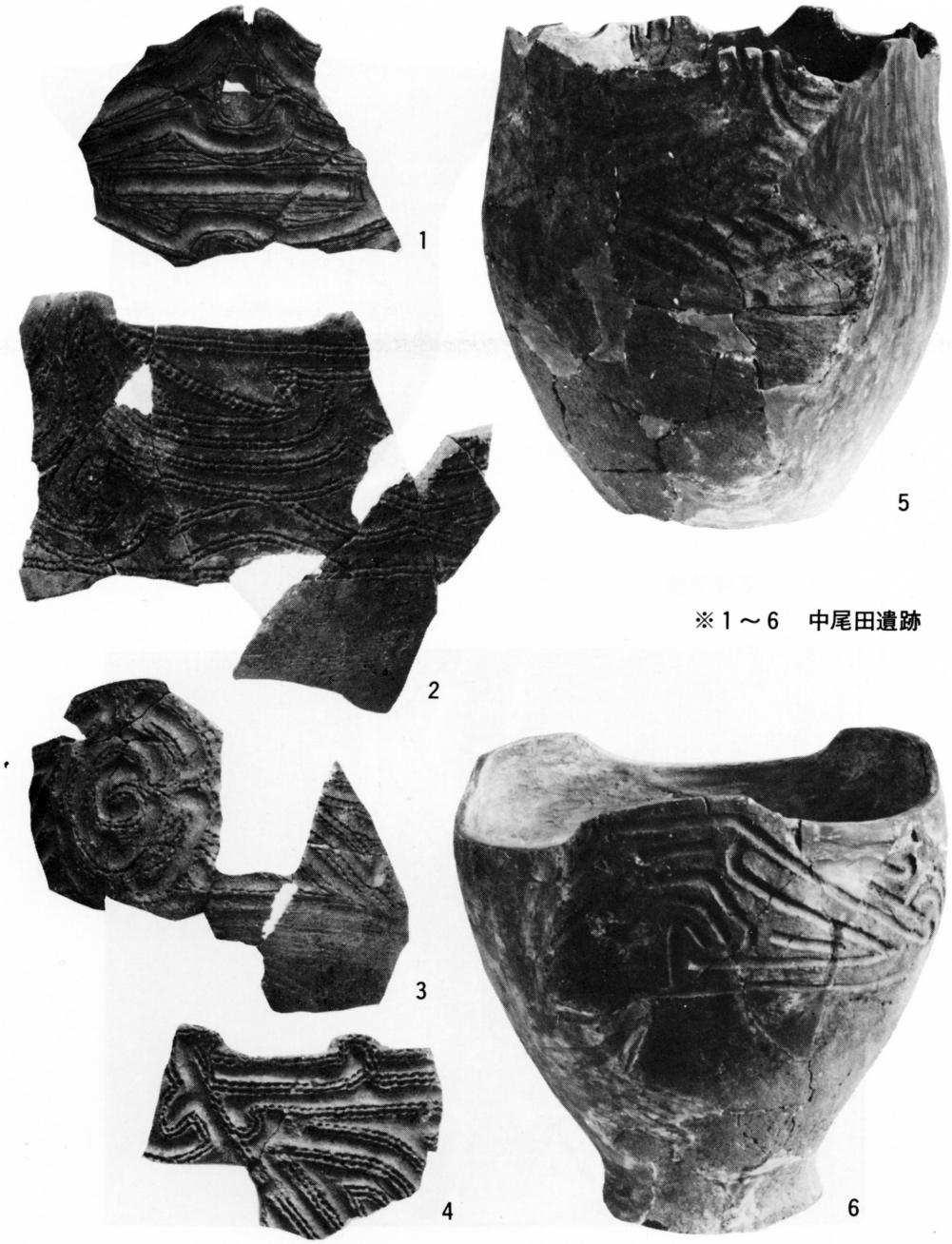
器形は，丸底で鉢又はビーカー形である。器壁は薄く胎土に滑石を含むものもある。文様には短線の凹線文を基本に直線文，羽状文，菱形文，連点文，幾何学文などを施す。



1・2　石峰遺跡

縄文時代前期　1は深浦式土器，器高約25cm。　2は春日式土器，器高約34.5cm。

深浦式土器の器形は，口縁部は外反し，胴部は直線的に下りゆるやかに弯曲して丸底になる。文様は，三角形・菱形・放射状に刻目隆帯文を貼付け，その間に細い沈刻線文を施す。春日式土器の器形は，頸部でしまりキャリパー形の口縁部。文様は粘土紐の渦巻文，波状文，連点文。

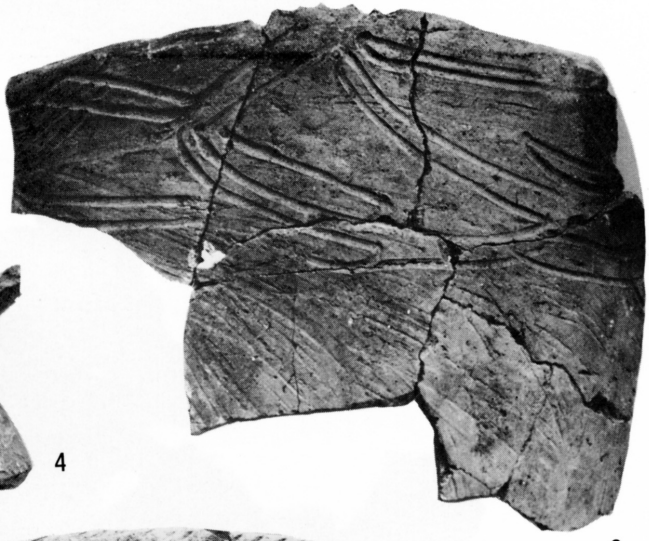


※1～6　中尾田遺跡

縄文時代中期（並木式土器…1～4）（阿高式土器…5・6，器高29cmの完形品）

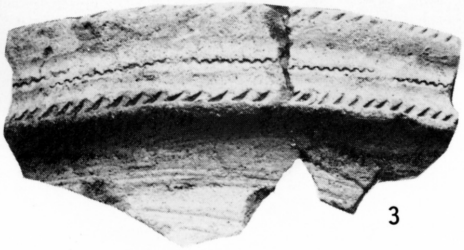
1～4は深鉢形の土器片である。胎土に滑石を含む。文様は，太形凹線文を施し，その凹線と凹線の間に半截した竹管・篦・貝殻などで瓜形状に施目してある。5・6は深鉢で，文様は大形凹線で押点文・渦巻文・曲線文を大きく描く。胎土は滑石を含むものもある。

1



2

4



3

※1　木場C
2　桑ノ丸遺跡
3・4　木佐貫原

縄文時代中期・後期

1は南福寺式土器（中期）。口縁部は肥厚し菱形や弧状の凹線文を施す。口唇部に突起を有す。

2は指宿式土器（後期）。深鉢形で外開きの口縁部となる。文様は2本の並行する曲線と直線文。

3・4は市来式土器（後期）。口縁部に隆帯を巡らし貝殻圧痕・爪形・凹線等の文様を施す。

1

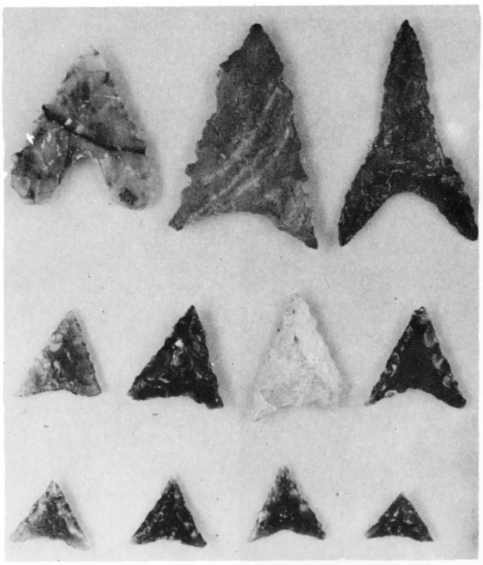
2

※ 1　桑ノ丸遺跡
　 2　山崎Ｂ遺跡

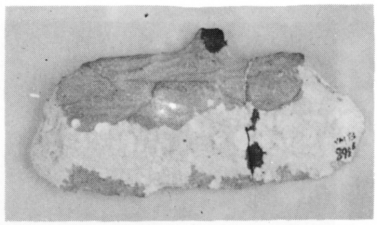
縄文時代後期・晩期

1は縄文時代後期の黒色研磨土器である。三万田式系統の土器と思われる。

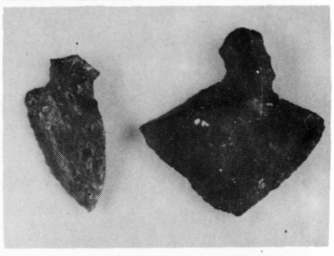
2は上加世田式土器（晩期初頭）深鉢形土器で，黒色で精製磨研されている。



①石鏃

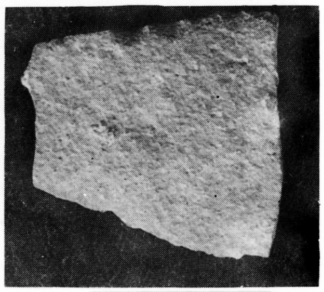


②石匕



③石匕

④スクレイパー



⑤剝片石器

⑥打製石斧

⑦磨製石斧

⑧磨製石斧

①～⑤
山崎Ｂ遺跡
⑥　三代寺遺跡
⑦　山崎Ｂ遺跡
⑧　木佐貫原遺跡

石鏃……矢の先につける三角形の石器で「やじり」と呼ばれるものである。

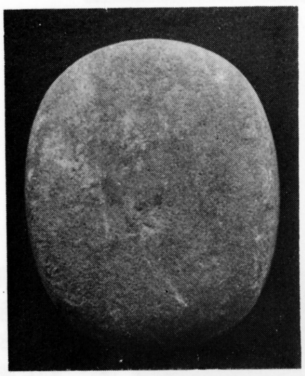
石匙……つまみを持つ石器で，皮剝ぎ等に使用されたとされている。

スクレイパー……掻器・削器と呼ばれ，皮はぎ等に使用されたとされている。

剝片石器……不定形な石の剝片に刃をつけたもので，利器として使用されたとされている。

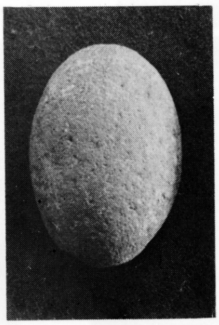
石斧……木を切ったり，土掘り具等として使用され，打製と磨製のものがある。

①石皿



②磨石

③凹石

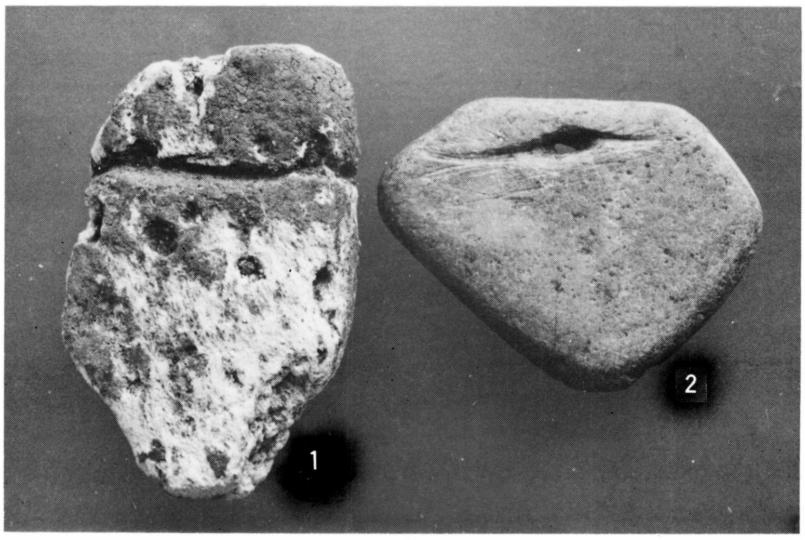


④敲石

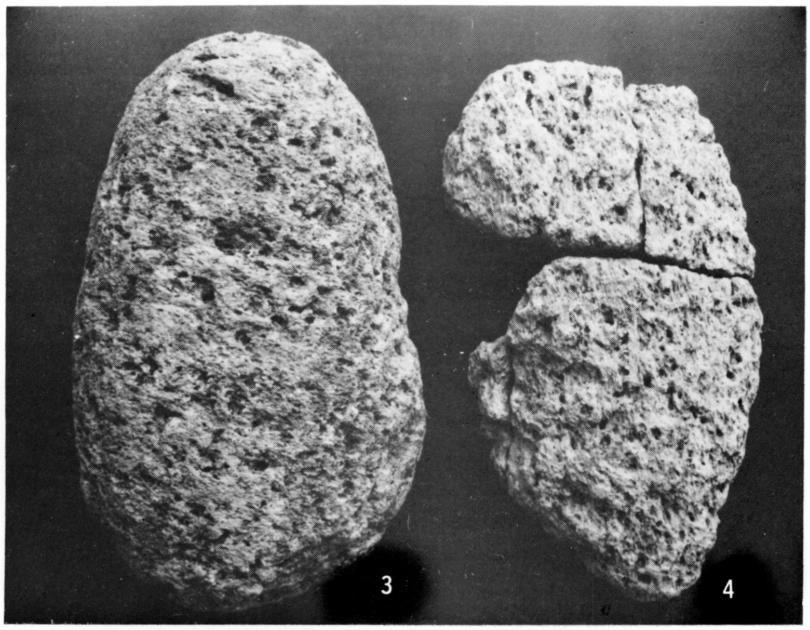
①～④　三代寺遺跡

石皿……磨石や敲石と併用して，主に木の実等をつぶしたり，粉にするのに使用されたとされている。

磨石・凹石・敲石……木の実を割ったり，つぶしたり，粉にしたりするために使用され，石皿と併用された考えられている。



1～4　加栗山遺跡出土



1は軽石製玩具。縦7cm，横4cm，厚さ2.2cm。上位に凹線を巡らす。

2はペンダント。縦4.5cm，横6cm，厚さ7mm。直径2mmの穴を開け，ひもを通したものであろう。

3・4は軽石製の陰陽石。加栗山遺跡のXVI号住居址内より出土した。

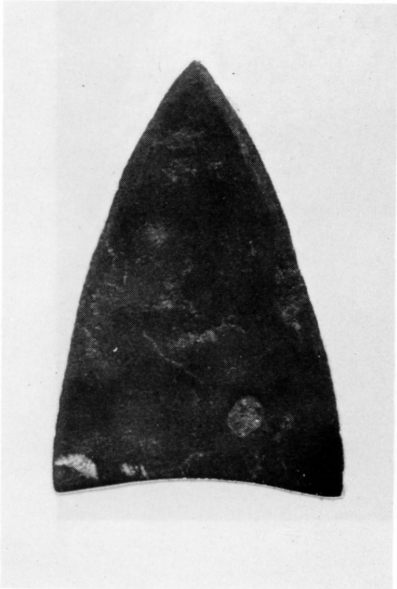
弥　生　時　代

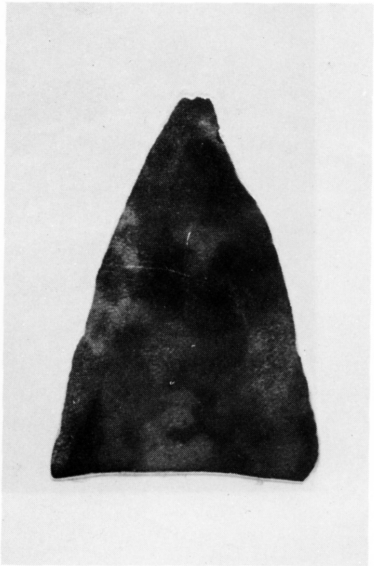
西暦紀元前300年ぐらい前から紀元後300年ぐらいは「弥生時代」といい，前期・中期・後期の3時期に区分されている。この時代の特徴は水稲が栽培され，土器・石器のほかに鉄器や青銅器などの金属器が用いられるようになったことである。

水稲の栽培が始まると，人々は水田の近くに集落をつくり，やがてこの中に有力者が現われるようになる。時代もすすんでくると，これら有力者の中から豪族が出て地域を治めるようになる。北九州を中心に分布する銅剣・銅鉾や幾内を中心に分布する銅鐸は，これらの豪族が所有していたものと考えられている。

鹿児島県の弥生文化は，北九州と同じころに始まったが，中期ごろから地域的な特徴が見られるようになってきた。

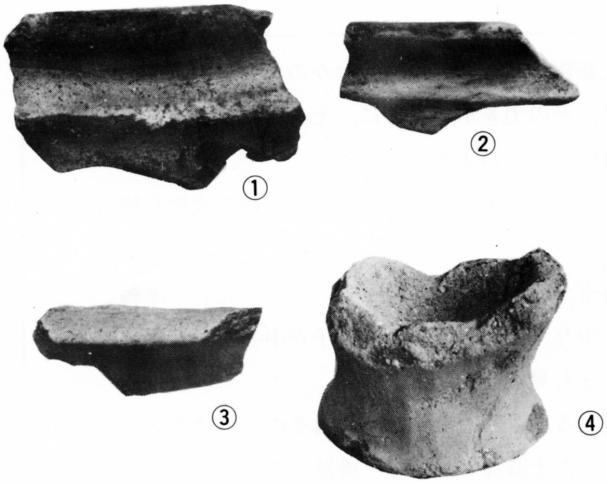
九州縦貫自動車道建設に関する調査においては，弥生時代の遺跡としてとらえられるものはほとんど無く，わずかに7遺跡において，土器片・磨製石鏃が確認されただけである。



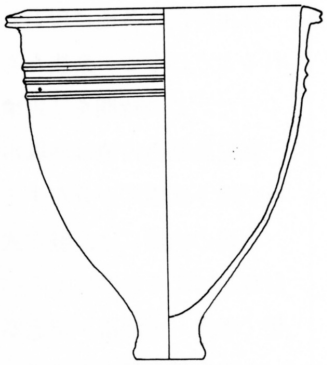


磨製石鏃（桑ノ丸遺跡）

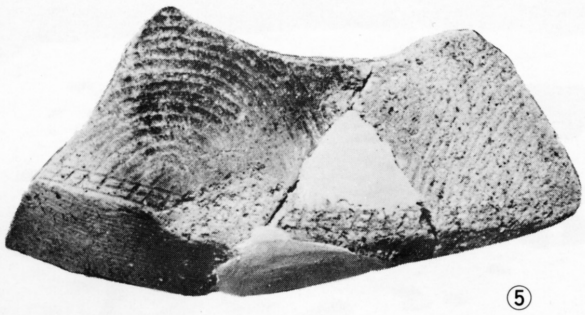
磨製石鏃……縄文時代の石鏃は打製石鏃で，打ちかいて作られたものであるが，弥生時代のものは磨製石鏃と言われるように表面をみがいて作られた鏃が使われるようになる。



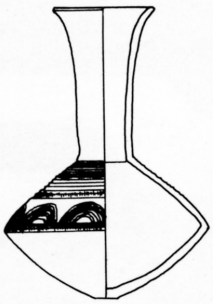
甕形土器



甕形土器模式図



長頸壺



長頸壺模式図

①～④　小瀬戸遺跡
⑤　　石峰遺跡

甕形土器……甕形土器は主に煮炊き用に使用されたものである。①～④は小瀬戸遺跡出土のもので弥生時代中頃のものである。

長頸壺……長頸壺は主に液体状のものを入れるものに使用されたと思われるもので，⑤は石峰遺跡から出土した，免田式土器と言われるもので，弥生時代後期とされている。